



朝焼けのSOAS／ブルネイ・ダルサラームの首都バンドルスリブガワンにて  
(蓮池優菜さん撮影 留学報告P32)

# 讃 樹 會

令和5年9月1日発行

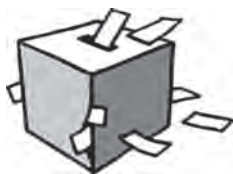
## CONTENTS

- 02 会長選挙・理事選挙告示
- 03 理事候補推薦用紙／役員一覧
- 05 同窓生教授就任挨拶
- 06 医学部教授退任挨拶
- 09 令和5年度研究助成金／研究奨励金 選考結果
- 10 令和4年度会計報告
- 11 令和5年度予算
- 12 理事会議事録
- 13 国外留学助成金 受賞の言葉
- 15 ニュースの窓
- 20 【特集】西医体4年ぶりの開催
- 26 関連病院紹介【滝宮総合病院】
- 30 学生短期留学報告
- 32 教室便り
- 47 編集後記／事務局からのお知らせ
- 48 関東支部会開催のお知らせ

発行 香川大学医学部医学科同窓会讃樹會  
〒761-0793 香川県木田郡三木町池戸1750-1  
TEL/FAX 087-840-2291  
E-mail mddousou@kagawa-u.ac.jp  
<https://dousoukai.site/sanjukai/>

発行人 平川栄一郎  
編集人 谷 丈二  
印刷所 株式会社





## 令和6年・令和7年度同窓会会長及び理事 選挙告示

選挙管理委員会 委員長 河井 信行

### 同窓会会長選挙

会則第3章 第9条、第10条、並びに同窓会選挙規定第5条の定めるところに基づき、香川大学医学部医学科同窓会讃樹會会長選挙を告示します。

立候補届け出締め切りは令和5年12月20日とします。

#### 会則 第3章 役員

第9条 本会の役員は次の各項によって規定される。

- 1 役員任期は2年で満了とする。但し再選は妨げられない。
- 2 役員は任期が満了した場合においても、後任者が選任されるまでは、その職務を行わなければならない。
- 3 役員に欠員が生じた場合は、その役員の選出母体から役員を選出し、残りの任期を勤める。

第10条 会長公選は2年に一度行わなければならない。

- 1 本会会長は、正会員による直接選挙で選出される。
- 2 会長選挙は、別に定める同窓会選挙規定に基づき、公平且つ開示して行わなければならない。

#### 同窓会選挙規定

第5条 会長選挙立候補者の所信表明開示

- 1 会長選挙立候補者は、所信表明を会報において正会員に開示しなければならない。
- 2 会長選挙立候補者は、正会員の中から少なくとも5名の推薦人氏名を公開しなければならない。

### 同窓会理事選挙

会則第3章 第9条、並びに会則第5章 第25条に基づき、理事選挙を告示します。つきましては、各卒年同窓の推薦を令和5年11月末日までにお願ひします。

#### 会則 第5章 役員および会議の役割

第25条 理事選出は、各卒年同窓の推薦にて理事候補となり、会員の有効投票数の過半数を得て、信任と承認されたものが理事となる。

#### ◆理事選挙の流れ◆

##### ① 【理事候補の推薦】

9月号会報で、理事候補推薦用紙をお送りします。(会報に中綴じされていますので切り離してご使用下さい。)同期で適任と思われる方の名前を、自薦他薦問わず最多で4名まで記入し11月末日までに返送してください。返送方法は同封の返信用封筒利用、FAX、メールのいずれでも結構です。

##### ② 【理事信任投票】

推薦が出揃いましたら、理事候補一覧を作成し、翌年の2月にお手元にお送りしますので、信任・不信任を記入の上、返送ください。

#### ◆◆ 会長選挙及び理事選挙 タイムスケジュール ◆◆

2023年9月	10月	11月	12月	2024年1月	2月	3月	4月	総会開催月
告示		理事推薦・立候補 返信締切 (末日)	会長立候補 締切 (20日)		会長選挙 理事選挙	投票		投票締切

会則及び同窓会選挙規定、今期の執行部並びに理事役員名につきましては、讃樹會HPにも掲載されています。

<https://dousokai.site/sanjukai/>

## 同窓会理事選挙

# 令和6年・7年度理事候補推薦用紙

現在の理事は、令和6年（2024年）3月に任期満了となりますので、会則9条及び会則25条にもとづき選挙を施行します。つきましては、各卒年同窓の理事候補推薦をお願いします。

理事選挙に際しては、現在の理事、執行部役員を含む全ての方を対象にご推薦下さい。但し、特別役員（母校教授就任者）は除きます。現在の理事及び執行部役員、特別役員（母校教授就任者）は裏面を参照下さい

正会員（貴方と同じ卒年）の中から適任と思われる理事候補を推薦して下さい。（4名以内）

( )

( )

( )

( )

令和5年 月 日

名前

卒年 S・H・R・院修了

記入の上、返信用封筒で返送下さい。FAX、メールでも結構です。

【締切2023年11月末日必着】

問合せ先：讃樹會事務局

TEL/FAX 087-840-2291

E-mail mddousou@kagawa-u.ac.jp

次年度理事候補推薦のための参考資料

現行年度（令和4年4月～令和6年3月）の役員一覧

会長 名誉会長 顧問 副会長

役 職	氏 名	卒年	役 職	氏 名	卒年
会 長	平川栄一郎	S61	名誉会長	濱本龍七郎	S61
顧 問	高橋 則尋	S61	顧 問	佐藤 清人	H元
副 会 長	大森 浩二	S61	副 会 長	安岐 康晴	院H3
副 会 長	中村 丈洋	H7	副 会 長	星川 洋一	H7

執行部スタッフ

役 職	氏 名	卒年	役 職	氏 名	卒年
事 業 局 長	出口 一志	S61	教育研修支援局長	安田 真之	H9
広 報 局 長	谷 丈二	H14	副局長（内科系）	土橋 浩章	H4
副 局 長	泉川 美晴	H13	副局長（外科系）	大島 稔	H16
局 員	近藤 彰宏	H22	副局長（地域医療）	市原新一郎	H3
学 術 局 長	西内 崇将	H12	事務局長（兼任）	安田 真之	H9
副 局 長	福長 健作	H21			

特別役員（※母校出身母校教授） 就任年順

	氏 名	所 属	卒年	氏 名	所 属	卒年
代表	西山 成	薬理学	H5	星川 広史	耳鼻咽喉科学	H2
	正木 勉	消化器・神経内科学	H2	三宅 実	歯科口腔外科学	院H3
	西山 佳宏	放射線医学	H2	杉元 幹史	泌尿器科学	S63
	木下 博之	法医学	H4	金西 賢治	周産期学婦人科学	H5
	横井 英人	医療情報学	H8	小坂 信二	薬剤学	院H25
	村尾 孝児	内分泌代謝・先端医療・臨床検査医学	H2	三宅 啓介	脳神経外科	H5
	日下 隆	小児科学	H3	横平 政直	医学教育学	H11
	三木 崇範	神経機能形態学	H3	岡野 圭一	消化器外科学	H4
	舛形 尚	総合診療医学	S61			

理事

卒 年	氏 名	卒 年	氏 名	卒 年	氏 名	卒 年	氏 名
S61年	植村 信久	H7年	井町 仁美	H16年	小谷野耕佑	H25年	内田 俊平
S61年	大西 宏明	H7年	高尾 努	H16年	宍戸 肇	H26年	多田 尚矢
S62年	河井 信行	H8年	野間 貴久	H17年	今井 秀記	H26年	中林 良太
S62年	川上 公宏	H8年	村田 晶子	H17年	築瀬 賢	H27年	穴田 雅英
S63年	西田 智子	H9年	小原 英幹	H18年	須藤 広誠	H27年	水尾 孝章
S63年	横井 徹	H9年	花岡有為子	H18年	村上あきつ	H28年	佐伯 岳信
H元年	上枝 宏和	H10年	石川かおり	H19年	藤原新太郎	H28年	西出 崇将
H元年	合田真由美	H10年	岡内 正信	H20年	中野 裕貴	H29年	志賀 崇史
H2年	羽場 礼次	H11年	小松原悟史	H20年	細川洋一郎	H29年	多々納幹貴
H2年	吉田 智子	H12年	高野耕志郎	H21年	石橋 洋一	H30年	東谷 雅人
H3年	中條 浩介	H12年	三崎 伯幸	H22年	樋笠 直哉	H31年	今上 雅史
H3年	坂東 修二	H13年	田岡利宜也	H22年	横田 直哉	R2年	合田 亮人
H4年	政田 哲也	H13年	西庄 佐恵	H23年	木田潤一郎	R2年	宮本貴和子
H5年	川西 正彦	H14年	澤登 慶治	H23年	井端 智裕	R3年	岡野 滉司
H5年	山本 由佳	H14年	森 照茂	H24年	久保 博之	R3年	板東 里佳
H6年	加地 良雄	H15年	加藤 琢磨	H24年	小林 俊博	院H8	小川 尊明
H6年	河北 賢哉	H15年	武田 敏宏				

## 同窓生教授就任挨拶

### 教授就任にあたって

夢を実現したければ、日々努力あるのみ！



横浜市立大学医学部薬理学

主任教授 徳留 健

(平成8年卒・11期生)

讃樹會の皆様こんにちは。平成8年香川医大卒の徳留 健です。令和5年4月1日付で、横浜市立大学医学部薬理学の第5代主任教授を拜命致しましたので、皆様に御挨拶させていただきます。私は母校の第二内科に入局し、4年間お世話になりました。当時の卒後臨床研修は努力規定であり、研修医の身分は不安定でした。私は大学院生として学費を払いつつ、無報酬で臨床研修するという大変問題の多い制度の最後の世代です。平成11年に関西医大の研修医の先生が過労死され、御遺族が訴訟を起こされた結果、平成14年に最高裁で「研修医は労働者である」との司法判断が下されたことが転機となり、新臨床研修制度がスタートしました。当時の香川医大附属病院でも、研修医の労働環境は劣悪でした。長時間労働は当たり前、研修医の指導を怠る指導医・不遜なナースや技師・大勢の前で個人を罵倒する看護部長等、問題が山積みでした。大学院で本格的に研究を始めると基礎研究への興味が湧き、学位取得後は研究に専念するため、平成12年から国立循環器病センター研究所に移りました。当時のボスは、ナトリウム利尿ペプチドファミリー・アドレノメデュリン・グレリン等を発見された寒川賢治先生でした。大変恵まれた環境で研究させて頂き、業績も順調に伸びました。時の経つのは早いもので国循の研究所でも古参の研究者となり、教授選にチャレンジすることにしました。一般的な基礎医学教室の教授選は、書類選考で候補者を3名程度に絞り込み、二次選考のプレゼンや面接後に投票で選出するというものです。一次選考に要する期間は様々ですが、今回は書類提出から7か月経過した10月に、私が二次選考に進んだという知らせが届きました。12月のプレゼン・面接を経て、内定を頂いたのは2月でした。約1年に及ぶ選考期間中は落ち着かない日々でしたが、教授に選出されて大変嬉しかったです。医局やサークルの先輩・同期からは祝福のメールや贈り物を頂きました。医局同門会からは南野教授名で大変立派な胡蝶蘭を頂き、讃樹會からは大変素敵な記念品を贈呈頂きました。先輩薬理学教授である富田修平先生・西山 成先生からは、心のこもったお手紙を頂きました。この場をお借りして、私の教授就任を祝って下さった皆様に、あらためて御礼申し上げます。

この原稿を書いているのは6月下旬ですが、国循の

ようなナショナルセンターとは違った、医学部の懐かしい雰囲気の中で日々頑張っています。4月には着任早々1年生・2年生の担任となり、5月には3年生の薬理学実習がありました。また本学医学部には約40名の教授が在籍していますが、教授全員に着任の御挨拶をして、今後の御協力をお願いしました。単身赴任で横浜に来ましたが、皆様に温かく迎えて頂き、以前から抱いていた大きな夢に向かって歩み始めたところです。

香川医大設立趣旨の柱は地域医療への貢献であり、その点において私は香川県民の皆様には十分な恩返しが出来ていないのかもしれませんが。卒業後も香川県に残り、地域医療に日々貢献されている先生方こそ称えられるべき、と私は考えています。

研修医時代は反吐の出る日々でしたが、学生時代はサッカー部・合唱部・軽音楽部に所属し、先輩・同期・後輩達と楽しい日々を過ごさせて頂きました。本学の学生にも、学生時代のつながりは大切にした方が良いとアドバイスしています。

後輩会員の皆さん、卒業後に自身の専門を変えることを躊躇する必要は全くありません。その時に一番やりたいことを、思いきりやれる環境を探して、精一杯努力しましょう。教授になりたければ血反吐を吐いてでも頑張りぬきましょう。自分の理想を実現したければ、それに見合う努力を継続するのは当然のことです。きっと誰かが見ていてくれます。そして、ある日突然幸運が訪れます。

### 略歴

- 平成8年3月 香川医科大学医学部卒業
- 平成8年4月 香川医科大学大学院博士課程入学（松尾裕英教授）
- 平成12年3月 香川医科大学大学院博士課程修了（学位取得）
- 平成13年4月 国立循環器病センター研究所 生化学部 流動研究員（寒川賢治部長）
- 平成16年4月 医薬品医療機器総合機構派遣研究員
- 平成17年4月 国立循環器病センター内科 シニアレジデント
- 平成18年6月 国立循環器病センター研究所 高血圧研究室長
- 平成22年4月 国立循環器病研究センター研究所 生化学部 室長
- 令和4年4月 同 心不全病態制御部 室長
- 令和5年4月 横浜市立大学医学部薬理学教室 主任教授（現職）

## 医学部教授退任挨拶

### 故郷の大学医学部に勤務して



香川大学名誉教授  
(分子細胞機能学講座)

中村 隆範

本年3月に香川大学医学部（分子細胞機能学講座・旧内分泌学講座）を定年退職いたしました、中村隆範です。在職中は讃樹會会員の皆様に公私ともに大変お世話になりました。心より御礼申し上げます。

私は平成9年（1997年）5月に、徳島大学分子酵素学研究センターより香川医科大学医学部に第2代の内分泌学講座の教授として着任いたしました。当時は医学部の開設に尽力された初代教授の先生が教育・研究の第一線でご活躍する中、少しずつ2代目の教授へと代替わりが進んでいる時期でした。内分泌学講座は文部科学省より特色ある講座（他大学医学部に基礎系講座として内分泌学の専門講座はありません）として認可を受けたと聞いておりましたが、一方で生化学系講座の一つとして位置付けられる先生もおられました。医学科3年生を対象に基礎学問としての内分泌学をどのように教えてゆくか大変戸惑いました。ホルモンを扱う内分泌学は基礎系講義の内容としては生化学や生理学の教科書でもその扱いは限られている上、医学部出身でない私が疾患を含むホルモン学を体系的に解説することはとても荷が重い仕事にも思えました。着任した5月には新年度の内分泌学講義は始まっており、前任教授の和田文雄先生が非常勤講師としてほとんどの講義を担当され、数コマを和田先生の指導を受けながら私が引き継ぐ形になりました。頼りない医学教育の始まりでしたが、短期間ながら和田先生から教を受けたことは大変有り難い経験でした。内分泌学の実習は糖尿病モデルマウスを使って血糖値を測定するなど生化学的な内容でしたが、西望助手が一手に引き受けてくれました。西先生は研究ではアンドロゲン応答性の精巣の新規遺伝子の探索などを行い、微生物学講座（岡部昭延教授）の松下治先生（現岡山大学教授）と共同研究も展開していました。私が着任後は平島光臣教授（免疫病理学）と開始したガレクチン（糖鎖を認識するレクチンの一種）の共同研究に参加して、遺伝子・タンパク質の発現や機能解析で多大な貢献してくれました。その後、学内の総合生命科学研究セン

ター（現研究基盤センター）の准教授へ転任されましたが、私の退職時まで研究の中心として働き助けてくれました。内分泌学講座での教育・研究は、西先生と徳島大学から転任時に一緒に移ってくれた東海林博樹先生（現金沢医科大学教授）が最初のスタッフとして参加し、西・東海林両先生の転出後は小川崇助教、野中康宏助教が引き継いでくれました。内分泌学／分子細胞機能学講座は准教授のポストがない半講座という立場ではありましたが、大学の使命である人材育成の点で十分に貢献できなかったことを、私自身は申し訳ない気持ちでおります。

私が医学部に着任した1997年は世間でいうところのバブル崩壊（1991-1993年頃）の痛みから抜け出せない経済的に厳しい時期でした。そのためか、医学部キャンパスのすぐ横を走る高松自動車道は橋脚だけあって一向に先の工事が進まない時期がありました。ところが突然工事が再開すると2003年には全線開通となり、医学部から県内各所へ1時間ほどで行ける交通の利便性ある県へと変貌しました。宇高連絡船（宇野-高松）で岡山に渡っていた時代を経験してきた高松出身の私には、1988年の瀬戸大橋の開通や1998年の明石海峡大橋による香川県から直接京阪神に渡るルートの完成は、国の進める大きなインフラ事業を故郷で実感する出来事でした。ゴルフのブービー賞ではありませんが、沖縄県を残して一県一医大構想で1978年に開校した香川医科大学は県内の地域医療の中核機関として、また県内高校生の進学先として大きな期待を背負って誕生したことを思い出します。今どの大学でも当たり前導入されているインターネットシステムは、本学医学部においては微生物学の松下治先生など有志の方のイントラネットの試行から始まったと聞いています。2003年に稼働を開始した「かがわ遠隔医療ネットワーク（K-MIX）」は、香川県、香川県医師会、香川大学医学部が連携した全国初の全県的な遠隔医療ネットワークで、1998年に本学の原量宏先生（附属病院教授）を中心に香川県のモデル事業で開始した妊娠

管理を目的とした電子カルテのネットワーク化（周産期ネットワーク）から始まっています。ChatGPTの普及が急速に進む中、若い（若いと自覚されている）医学部同窓生の皆様が新しい社会システムに挑戦し続ける姿を見たいと思います。最後に、現在医学部キャ

ンパスの再開発で汗を流していらっしゃる教職員の方々にも御礼申し上げます。退職後も香川大学医学部をできる限り応援させていただきます。長い間、本当にありがとうございました。

## 退任ご挨拶

### ～麻酔科崩壊せず～

私は、本年3月、香川大学を退職いたしました。2008年6月18日の教授会での麻酔学講座教授候補者選挙直後に、阪本医学部長（当時）から連絡があり「すぐにでもきてほしい」ということで、8月1日に着任いたしました。当時、日本全国で大学病院「麻酔科崩壊」が喧伝されており、前任地の京大麻酔科でもやはり「崩壊」の危機にありました。香大麻酔科は、さらに厳しい状況にあると認識し、私の最大（最低？）の任務は香大麻酔科を「崩壊」させないことであると腹をくくりました。在任中は、やや大げさな物言いですが、増大する麻酔科医需要＝麻酔科医不足に苦しめられ続けた、というのが正直なところでした。赴任当時、香大麻酔科からの香川県内の病院への常勤麻酔科医派遣は途絶しておりました。「崩壊させない」＝「麻酔科医を増やす」ためにも、若手育成可能な関連教育病院を香川県内に確保することが、赴任当初からの目標でした。おかげさまで、少しずつですが医局員が増え、2014年に、ようやく、坂出市立病院を関連教育病院とすることができました。2021年には、高松赤十字病院をはじめ県内7つの病院に常勤麻酔科医を派遣できるようになりました。しかしながら、2019～22年の4年間、COVID-19 pandemicと重なるように、入局者が皆無となり、香大病院ならびに関連施設の皆様には多大なご迷惑をおかけすることになってしまいました。深くお詫び申し上げます。今年度、香大麻酔科専門研修プログラムに専攻医5名（香大麻酔科入局者4名＋高松赤十字病院麻酔科専攻医1名）をお迎えでき、やっと一息つけたものと胸をなでおろしましたところ、この4月着任予定であった私の後任の先生が突如着任不能になるという一悶着がありました。ようやく、この8月に群馬大学から荻野祐一先生にご赴任いただけ

ることになり、安堵しているところです。

麻酔科医療で最も重要なことは手術患者の安全確保です。周術期合併症ができるだけ少ない質の高い麻酔・周術期医療の提供が不可欠です。患者さんを苦しめる最も頻度の高い術後合併症は今もなお「痛み」です。安全確保と質（特に鎮痛の質）向上のため、赴任直後より、超音波ガイド下末梢神経ブロックとオピオイド節減多様式鎮痛の導入、看護師と共働での麻酔科術前評価外来・術後回診（術後急性痛治療）チーム、麻酔後回復室（手術室回転効率上昇の意味もあります）設置などに取り組みました。集中治療とペイン・緩和医療も麻酔科医療の重要な柱ですが、赴任当初、これらを維持できるかどうか大変危惧いたしました。皆様のご尽力のおかげで、これらもなんとか維持発展できました。大変感謝しております。

大学の最も重要な使命は「知」の伝承と創造（＝教育と研究）です。人手不足のため、麻酔科ラボでの基礎的研究はなおざりになってしまいましたが、赴任以前から行っておりました京大電気工学との共同研究を続け、なんとか、在任中も科研費取得ができ、学会賞もいただきました。在任中、9名の医局員に学位をいただきましたが、学位取得にあたり、炎症病理学（阪本教授、上野教授）、細胞情報生理学（徳田教授）、公衆衛生学（平尾教授）、薬理学（西山教授）をはじめ基礎系教室の多くの先生に大変お世話になりました。心より御礼申し上げます。

2009年6月～23年3月、ME機器管理センター（22年から臨床工学部）長を拝命いたしました。17年の突如の「崩壊」、臨床工学技士業務に多大な支障をきたしたことは、慚愧に耐えない思い出です。20年に臨床工学技士長職を新設していただき、体制立て直しをは



香川大学名誉教授  
（麻酔学講座）

白神豪太郎

かれたことで「災い転じて福」となりました。さらに、麻酔科医支援体制の一環として22年から麻酔科医アシスタント臨床工学技士職を導入していただきました。関係の皆様へ深謝申し上げます。

2011年4月～17年9月、副病院長（再開発・広報担当）を拝命いたしました。病院再開発推進室長として病院再開発に関与させていただいたこと、「イキイキさぬき健康塾」の開始や「Q&Aでわかる香川大学医学部附属病院の最新治療」の編集に関わらせていただいたことなどが懐かしく思い出されます。2019年10月～21年9月、副病院長（企画・診療担当）を拝命し、医療安全管理部長、高難度新規医療技術等評価部長、特定行為研修管理委員長、臨床倫理委員長なども併任し、おおいに勉強させていただきました。2021年4月～23年3月には手術部長も併任いたしました。麻酔科医不足で皆様方にはご迷惑をおかけいたしました。この間、病院事務や看護部の皆

様方には何かとお世話になりましたこと、感謝の念にたえません。

在任中、なんとか麻酔科を「崩壊」させることなく勤めることができましたのも、讃樹會の諸先生のご支援の賜物と深く感謝しております。14年余にわたり、諸事大変お世話になり、誠にありがとうございました。誌上を借りて厚く御礼申し上げます。末筆ながら、讃樹會、香川大学ならびに香大麻酔科のこれからのますますのご発展を心よりお祈り申し上げます。



## 令和5年度 讃樹會研究助成金／研究奨励金 選考結果

## 速報

部門	受賞者	研究題目
研究助成金	中村 信嗣 (平成16年卒) 香川大学 小児科	「臨床応用にむけた新生児仮死児に対する水素ガス吸入療法治療プロトコルの確立～脳循環酸素代謝・脳波計測を用いた治療効果判定方法を用いて～」
	大浦 杏子 (平成22年卒) 香川大学医学部附属病院 消化器内科	「アルコール性脂肪肝炎の進展と発癌制御に関わる免疫微小環境の解明と細胞治療への応用」
研究奨励金	阪口 正洋 (平成23年卒) 日本医科大学 血液内科	「TP53変異陽性急性骨髄性白血病に対するMCL-1制御を介した新規治療法の開拓」

## ◆選考過程のご報告◆

第19回（令和5年度）讃樹會研究助成者及び研究奨励者について選考を行いました。研究助成金部門4件、研究奨励金部門3件の全7件の申請があり、学外評価委員14名によって評価を受けました。

評価に当たって、学外評価委員が正当に評価できないと判断した申請書に対しては、採点しなくてもよいこととしております。採点無しというケースを可能な限り少なくするべく、提出された申請内容に鑑み、専門に近い学外評価委員5名を選定し、具体的には学外評価委員一人につき、2～3件の採点をお願いしました。

採点は6つの項目（1. 研究課題の学術的重要性・妥当性、2. 研究計画・方法の妥当性、3. 研究課題の独創性・革新性、4. 研究課題の波及性、5. 研究の実現性、6. 研究の学術的優先度）に対して、それぞれ5段階評価（5点：極めて高い、4点：高い、3点：やや高い、2点：やや低い、1点：低い）を行って頂き、合計点を平均しました。

以上の厳正なる審査の結果、獲得点数は、研究助成金部門では中村信嗣先生の「臨床応用にむけた新生児仮死児に対する水素ガス吸入療法治療プロトコルの確立～脳循環酸素代謝・脳波計測を用いた治療効果判定方法を用いて～」と、大浦杏子先生の「アルコール性脂肪肝炎の進展と発癌制御に関わる免疫微小環境の解明と細胞治療への応用」の2名が同点一位（4.03点／5点満点）となりました。

研究奨励金部門では阪口正洋先生の「TP53変異陽性急性骨髄性白血病に対するMCL-1制御を介した新規治療法の開拓」（3.67点／5点満点）が第一位となりました。また、今年度の全体平均点は3.55点／5点満点でした。

研究助成金、研究奨励金の各部門の受賞者は1名ずつという応募要項規定を踏まえた上で、厳正なる学外評価において2名が同点の最高点を獲得されたことを重視し、これまで学外評価での最高点獲得者を受賞者としてきたことに基づき、8月開催の令和5年度第2回理事会において、研究助成金部門では、今回、特例として、中村信嗣先生と大浦杏子先生の

お二人にそれぞれ金百万円を授与することを決定しました。研究奨励金部門では、阪口正洋先生に金五十万円を授与することを決定しました。

受賞されました先生には、心よりお喜び申し上げますとともに、研究の益々のご発展をお祈り申し上げます。学外評価委員の先生方におかれましては、大変お忙しい中、無償でご協力頂きましたことを誌上からではございますが、心から感謝申し上げます。

讃樹會研究助成 学外評価委員（敬称略）

## 臨床科

氏名	
1 伊藤 進	香川大学 名誉教授
2 今井裕一	愛知医科大学 名誉教授／多治見市民病院 病院長
3 千田彰一	香川大学 名誉教授
4 成瀬光栄	国立病院機構京都医療センター 臨床研究センター 臨床研究企画運営部 特別研究員／医療法人仁会武田総合病院 内分泌センター長
5 原 量宏	香川大学名誉教授／医学部医療情報学 客員研究員
6 水野博司	順天堂大学医学部形成外科学講座 教授
7 吉栖正生	広島大学大学院医系科学研究科心臓血管生理医学 名誉教授／安田女子大学看護学部教授

## 基礎科

1 梶谷文彦	川崎医科大学名誉教授／岡山大学特命教授／北海道大学客員教授
2 小林良二	香川大学 名誉教授
3 阪本晴彦	香川大学 名誉教授
4 田畑泰彦	京都大学医生物学研究 再生組織構築研究部門 教授
5 徳光 浩	岡山大学学術研究院ヘルスシステム統合科学学域 バイオ・創薬部門 細胞機能設計学 教授
6 西堀正洋	岡山大学大学院医歯薬学総合研究科 創薬研究推進室 特命・特任教授
7 森田啓之	東海学院大学健康福祉学部管理栄養学科 教授

# 令和4年度会計報告

## 令和4年度収支計算報告書

令和4年4月1日から令和5年3月31日まで

事業活動収支の部

単位：円

科目	予算 A)	決算 B)	差額 B) - A)
<b>1. 事業活動収入</b>			
①会費・入会金収入	8,500,000	7,306,174	-1,193,826
②寄付金・広告収入	750,000	759,340	9,340
③委託手数料収入	3,000,000	3,121,489	121,489
④利息	0	313	313
<b>事業活動収入計</b>	<b>12,250,000</b>	<b>11,187,316</b>	<b>-1,062,684</b>
<b>2. 事業活動支出</b>			A) - B)
①事業費支出			
会報制作費	1,100,000	863,500	236,500
後援協賛事業費	450,000	448,485	1,515
支部・同期会費	200,000	85,925	114,075
学術助成金事業費	1,650,000	1,604,275	45,725
国外留学助成金事業費		0	
学生援助費	1,400,000	190,000	1,210,000
国際交流協力費		0	
地域連携推進事業費	50,000	50,000	0
研修医協力費	700,000	510,108	189,892
総会費	120,000	117,240	2,760
講演会費	500,000	498,598	1,402
学会助成金事業費	300,000	80,000	220,000
新型コロナウイルス対策支援事業費	500,000	218,000	282,000
<b>事業費支出小計</b>	<b>6,970,000</b>	<b>4,666,131</b>	<b>2,303,869</b>
②管理費支出			
事務人件費	2,220,000	2,050,700	169,300
事務局・各委員会運営費	1,400,000	1,185,823	214,177
事務局設備投資費	0	0	0
ホームページ管理費	55,000	55,000	0
通信費	1,050,000	968,291	81,709
慶弔費	300,000	206,980	93,020
雑費	100,000	85,362	14,638
予備費	100,000	0	100,000
<b>管理費支出小計</b>	<b>5,225,000</b>	<b>4,552,156</b>	<b>672,844</b>
<b>事業活動支出計</b>	<b>12,195,000</b>	<b>9,218,287</b>	<b>2,976,713</b>
<b>当期事業活動収支差額</b>	<b>55,000</b>	<b>1,969,029</b>	
<b>前期繰越収支差額</b>	<b>49,237,291</b>	<b>49,237,291</b>	
<b>次期繰越収支差額</b>	<b>49,292,291</b>	<b>51,206,320</b>	

## 貸借対照表

令和5年3月31日現在

単位：円

資産の部	金額	負債及び 正味財産の部	金額
資産		負債	
1. 流動資産	(51,206,320)	1. 固定負債	(16,000,000)
現金・預金	51,206,320	同窓会館建設引当金	16,000,000
2. 固定資産	(16,000,000)		
同窓会館建設引当預金	16,000,000	正味財産	51,206,320
<b>合計</b>	<b>67,206,320</b>	<b>合計</b>	<b>67,206,320</b>

## 財産目録

令和5年3月31日

単位：円

資産の部		金額
1. 流動資産		
(1) 現金・預金		
イ) 手許現金		368,012
ロ) 普通預金 百十四銀行三木支店		424,920
ハ) 郵便貯金 郵便振替貯金事務センター		39,134,817
ニ) 定期預金 香川銀行本店営業部		10,196,460
百十四銀行医大前出張所		1,082,111
流動資産合計		51,206,320
2. 固定資産		
(1) 特定目的資産 同窓会館建設引当預金		16,000,000
固定資産合計		16,000,000
資産合計		67,206,320

## 固定資産の内訳

(令和5年3月31日現在)

資産の名称	数量	取得年月	取得価額	償却方法	耐用年数	償却率	当期償却額	未償却残高
事務局複合機	1	R2.6	154,000	一括償却	3	0.333	51,334	0
			154,000				51,334	0



## 令和5年度予算

## 令和5年度予算

令和5年4月1日から令和6年3月31日まで

事業活動収支の部

単位：円

科 目	5年度予算	4年度予算	4年度決算
<b>1. 事業活動収入</b>			
①会費・入金収入	8,000,000	8,500,000	7,306,174
②寄付金・広告収入	750,000	750,000	759,340
③委託手数料収入	3,200,000	3,000,000	3,121,489
④雑収入	0	0	313
<b>事業活動収入計</b>	<b>11,950,000</b>	<b>12,250,000</b>	<b>11,187,316</b>
<b>2. 事業活動支出</b>			
<b>①事業費支出</b>			
会報制作費	950,000	1,100,000	863,500
後援協賛事業費	550,000	450,000	448,485
支部・同期会費	200,000	200,000	85,925
学術助成金事業費	1,650,000	1,650,000	1,604,275
国外留学助成金事業費	750,000		0
学生援助費	800,000	1,400,000	190,000
国際交流協力費	200,000		0
地域連携推進事業費	100,000	50,000	50,000
研修医協力費	700,000	700,000	510,108
総会費	0	120,000	117,240
講演会費	500,000	500,000	498,598
学会助成金事業費	100,000	300,000	80,000
新型コロナウイルス対策支援事業費	90,000	500,000	218,000
緊急追加協力費	60,000		
<b>事業費支出小計</b>	<b>6,650,000</b>	<b>6,970,000</b>	<b>4,666,131</b>
<b>②管理費支出</b>			
事務人件費	2,200,000	2,220,000	2,050,700
事務局・各委員会運営費	1,200,000	1,400,000	1,185,823
ホームページ管理費	55,000	55,000	55,000
通信費	1,350,000	1,050,000	968,291
慶弔費	250,000	300,000	206,980
雑費	100,000	100,000	85,362
予備費	100,000	100,000	0
<b>管理費支出小計</b>	<b>5,255,000</b>	<b>5,225,000</b>	<b>4,552,156</b>
<b>事業活動支出計 (①+②)</b>	<b>11,905,000</b>	<b>12,195,000</b>	<b>9,218,287</b>
当期事業活動収支差額	45,000	55,000	1,969,029
前期繰越収支差額	51,206,320	49,237,291	49,237,291
次期繰越収支差額	51,251,320	49,292,291	51,206,320

## 理事会議事録

### 令和5年度第1回理事会議事録 令和5年5月22日 (WEB)

全理事67名中、WEB参加19名、委任状32名、計51名の参加があった。理事の過半数(34名)以上の参加により理事会が成立した。

#### 1. 令和4年度決算承認

資料として、収支計算報告書、貸借対照表、財産目録、固定資産台帳、監査報告書が提示され、収支計算報告書に沿って出口事業局長から令和4年度決算の収支が報告された。会費収入が減少したが、コロナの影響を受けた項目の支出が減少したため、相対的に収支差額がプラスになったことが説明された。引き続き西田監査委員長から監査報告が行われた。参加の全理事により、令和4年度決算が承認された。

#### 2. 令和5年度予算案審議・決定

令和5年度の予算案が出口事業局長から説明された。事業活動収入については、会費収入はこれまでの実績を基に算出、寄附・委託手数料は昨年並みと見込む。事業活動支出については、事業費支出として、会報制作費はページ数の増減に影響を受けるが昨年決算より少し増額、国外留学助成金、学生援助費、国際交流協力費はコロナ明けという状況もあり今年度は項目別に予算化する、新型コロナウイルス対策支援事業費は、

昨年の決算並みとする。管理費支出は、通信費に関して、ゆうメール便に同封できない信書の普通郵便料金が加算され増額しているが、他の項目についてはおおむね昨年の決算並みにする。

安田事務局長から医学部祭への援助内容について執行部の提案として2点補足説明があった。今年はコロナ前の水準で医学部祭の開催を予定しているがスポンサーが減る懸念があるため、医学部祭実行委員会より讚樹會に援助の依頼があった。これを受け、後援協賛事業費としての医学部祭への援助金をこれまでの5万円から10万円に増額し、これにコロナ対策費なども加えて、総額で昨年並みの25万円を計上するとした。

以上の令和5年度予算について、参加の全理事により承認された。

また、執行部からの提案として安田先生から、学生による医学部祭スポンサー集めへの協力の一環で、事務局から事前に県内の会員に協力を呼び掛け、その際、学生の訪問について承諾の有無を伺い、承諾のあった会員をリスト化して学生に紹介することについて、理事会での審議を求めた。この医学部祭協力支援について、参加の全理事から賛同があった。

### 令和5年度第2回理事会議事録 令和5年8月1日 (WEB)

全理事67名中、WEB参加19名、委任状26名、計45名の参加があり、理事会が成立した。

#### 1. 令和5年度研究助成金及び研究奨励金の審査・決定

西内崇将学術局長より選考過程についての説明があった。研究助成金4件、研究奨励金3件の申請があり、学外評価委員14名の採点を集計した評価結果が資料とされ、研究助成金部門で、2名が同点一位となっていることが報告された。応募要項では、研究助成金、研究奨励金を各1名ずつと規定されていることを踏まえた上で、厳正なる学外評価において2名が同点の最高点を獲得されたことを重視し、これまで学外評価での最高点獲得者を受賞者としてきたことに基づき、研究助成金部門では、今回、特例として、中村信嗣先生と大浦杏子先生の2名にそれぞれ金百万円を授与することを決定した。研究奨励金部門では、最高点の阪口正洋先生に金五十万円を授与することを決定した。

また、同点一位等、特異なケースが発生した場合は、その都度、情勢に合わせて最終的に理事会で検討し公平に決定することとなった。必要であれば、要項にその旨を追加する。

引き続き西内学術局長から、査読者の選定について、COIに抵触するかどうかなど、フェアな判断ができな

い状況になりえるのを回避する方法として、査読いただけるかどうか事前に演題からご判断いただき、承諾いただいた場合に、申請論文を査読いただくことが執行部案として提案され、承認された。

#### 2. 学会助成金審査

2024年開催予定の1件への助成が執行部案のとおり決定した。助成額は要項に則る。

第16回日本Acute Care Surgery

(2024年9月/高松) 助成額10万円。

#### 3. 次年度会長選挙並びに理事選挙の日程確認

令和6年度は、会長選挙並びに理事選挙の実施年であることが告知され、総会開催日(未定)までの選挙スケジュールの概略が資料で提示された。

#### 4. 学生の競争的資金審査

以下の2件へ各2万円の助成が執行部案のとおり決定した。

①学生ACLS勉強会

②香川国際協力NGO U-dawn

#### 5. その他

学会助成金について、以下の意見があった。

①助成額増額の再検討 ②申請時期が開催前年の6月末は早すぎる。

## 国外留学助成金 受賞の言葉

### 令和4年度第2回国外留学助成金

木田潤一郎（平成23年卒・26期生） 香川大学医学部 血液・免疫・呼吸器内科学

留学先機関：Cincinnati Children's Hospital Medical Center  
（シンシナティ小児病院医療センター）

留学期間：2023年7月～2026年6月

研究課題：「骨髄異形成症候群の分子病態の解明：  
自然免疫異常と骨髄内炎症の協調作用の観点から」



#### 【謝辞】

この度は国外留学助成を頂戴し、讃樹會の皆様にご心より御礼申し上げます。私は血液内科を専門とする中で、骨髄異形成症候群（MDS：myelodysplastic syndromes）に興味をもち、川崎医科大学の通山薫教授の下で基礎研究を行いました。この際に参加した米国血液学会にて衝撃を受け、米国留学を目指すようになりました。その後、香川大学血液内科にて門脇則光教授の下でご指導頂きながら自然免疫異常とMDSの病態の関連をテーマに研究を継続しました。本留学では、米国屈指の小児病院であり基礎研究も盛んなCincinnati Children's Hospital Medical Centerにて、本分野で高名なDaniel Starczynowski博士とTimothy Chlon博士の下で、自然免疫とMDSの関連、特にDDX41という分子に焦点を当てて研究を行う予定です。MDSのみならず、他病態への応用や生理的な新規機能の発見も目指し、様々な病気の患者さんに貢献できるよう努力したいと思っております。この場をお借りしまして、本助成のご推薦を頂きました大西宏明先生、川上公宏先生ならびに多大なるご支援を頂きました香川大学血液・免疫・呼吸器内科学の皆様にご心より感謝申し上げます。



# ニュースの窓

## 希少糖入りの糖尿病食で2型糖尿病患者の食後血糖値を改善 令和5年6月

### 2型糖尿病患者の新たな食事療法への応用に期待

- ◆希少糖 D-アルロースを利用した糖尿病治療食が、2型糖尿病患者の食後血糖を抑制する効果があることを世界で初めて立証しました。
- ◆希少糖 D-アルロースは、様々な基礎研究で糖代謝改善作用・食後血糖改善効果、抗肥満作用が期待されていましたが、人の2型糖尿病患者を対象に、希少糖を食事療法に活用した際の効果については、これまで詳細な報告はありませんでした。
- ◆今回、2型糖尿病における治療の根本となる食事療法に希少糖が有効であることが分かり、今後、新たな食事療法への応用が期待されます。

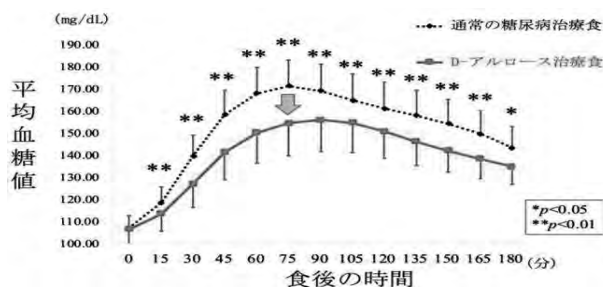
#### ■発表の概要

香川大学医学部附属病院 内分泌代謝内科の研究グループは、希少糖 D-アルロースを利用した糖尿病治療食が、2型糖尿病患者の食後血糖を抑制する効果があることを世界で初めて立証しました。

希少糖(自然界で存在量の少ない単糖とその誘導体)の一種である D-アルロースは、糖代謝改善作用・食後血糖改善効果に加え、体重減少などによる抗肥満作用も期待されています。今回、ポスコフードサービス(株)と共に D-アルロースを含有する治療食を開発し、2型糖尿病患者に摂取して頂いたところ、通常の糖尿病治療食(カロリーや栄養バランスが厳格に管理された食事)と比較しても、食後の血糖値を有意に抑制することが分かりました(右図参照)。人の2型糖尿病患者の食事療法として、希少糖を実際に臨床応用し、その有効性を持続血糖測定器を使用して詳細に検証した世界で初めての報告であり、2型糖尿病における治療の根本となる食事療法において、今後さらなる食事療法への応用が期待されます。

これらをまとめた研究成果が *Nutrients* 誌に掲載されました。

(URL : <https://www.mdpi.com/2072-6643/15/12/2802>)



- 担当：香川大学医学部 内分泌代謝・先端医療・臨床検査医学  
村尾孝児 福長健作
- 共同研究：ポスコフードサービス(株)
- お問い合わせ先：香川大学医学部附属病院 内分泌代謝内科  
TEL：087-891-2230 FAX：087-891-2230

香川大学 HP News Releaseより転載

### 第38期生卒業／学位授与式／謝恩会

令和5年3月24日

新型コロナウイルス感染症の5類移行をおよそ1ヶ月後に控えたものの、いまだ完全な終息が見込めないため、3月24日（金）の香川大学卒業式・修了式は、昨年同様に式典を本学キャンパスで実施し、学位記授与は学部キャンパスごとに、参加者を卒業生・修了生のみ限定して挙行されました。

医学部臨床講義棟2階において行われた医学部医学科学学位授与式では、医学部長、医学科長、病院長からの祝辞、砂田賞、医学部長賞の授与、卒業生代表からの卒業記念品贈呈に続き、第38期卒業生114名一人一人に学位記が授与されました。

この日、同窓会からは卒業記念品として、ネームペンを全員に贈りました。

学位授与式終了後、引き続き臨床講義棟2階において、飲食を伴わない形で謝恩会が行われました。ご出席いただいた先生方一人一人から大変心のこもったエールを頂戴し、卒業生からは花束と共に感謝の言葉を伝えました。最後に、6年間、共に医学を学んだ講堂での集合写真撮影を行いました。

毎年の6年生が決定するベストティーチャー賞（正式名称はOutstanding Teacher of the Year）は、医学教育学准教授坂東修二先生が実に6回目を受賞されました。



三木医学部長 告辞



門協病院長



学位記授与



学位授与式

謝恩会



日下 隆医学科長



藤原祐一郎教授



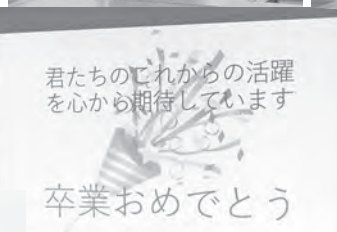
山本 融教授



星川広史教授



荒木伸一教授



三宅啓介教授



和田健司教授



右 講樹會會長代理 岡野圭一教授  
左 謝恩会実行委員長 矢野雄大君



祖父江 理講師



謝恩会での花束贈呈





謝恩会集合写真

## 令和5年度入学式 — 医学科新入生109名

令和5年4月3日

4月3日（月）に、香川大学幸町キャンパスにおいて大学院入学式並びに学部入学式が執り行なわれました。学部新入生の内訳は、教育学部172名、法学部171名、経済学部256名、医学部193名、創造工学部339名、農学部159名、編入学49名の計1339名です。

医学部193名の内訳は、医学科は109名、看護科は62名、臨床心理学科22名です。

本学での式典後、新入生は各キャンパスへ移動し、学部でのオリエンテーションを受けました。



本学での入学式を終え、医学部へ到着した新入生



臨床講義棟2階でオリエンテーション

**令和5年度 新研修医をよろしくお祝いします！****令和5年4月1日**

今春、医科32名・歯科2名の新研修医を本院に迎えました。

新研修医達は、不安と緊張感を感じながらも、各病棟・診療科での研修をスタートし毎日励んでおります。皆様方には研修医育成へのご理解とご支援を賜りますようお願い申し上げます。(卒後臨床研修センター)



集合写真：令和5年度採用新研修医 2023年3月30日撮影

**新福利厚生施設棟完成 2階に会議室等利用可能なマルチスペースも 令和5年3月1日**

新たな福利厚生施設棟が外来診療棟前に完成し、令和5年3月1日（水）から運用を開始しました。

この施設は、患者さんをはじめとした病院利用者へのサービス向上および大学関係者の福利厚生の充実を図ることを目的として整備しました。

構造は、地上2階建てで、建物全体を大きな庇（ひさし）が覆っており、このことによって、雨天時であっても、外来診療棟と福利厚生施設棟間を雨に濡れることなく快適に移動いただけるようになりました。

1階部分には、調剤薬局、患者さんの送迎待合、バス待合、授乳室など、患者さんをはじめとした病院利用者の皆さまに快適にご利用いただける空間を整備しています。

また、2階部分には、大学関係者が会議室等として利用可能なマルチスペースを整備しています。

本院では、この福利厚生施設棟をはじめ、利用者の皆さまが快適にご利用いただける環境の整備を今後も進めてまいりますのでよろしくお願いいたします。(総務課)

病院正面玄関の右前方に建つ新福利厚生施設棟



2階のマルチスペースの一部

## 病院広報誌「KUH」創刊のご紹介

香川大学医学部附属病院広報誌「KUH 香大病院 PAPER」は令和4年12月に創刊、続いて本年5月に2号が発行されました。

この広報誌は、高度な医療を必要とする方々とつながり、ささえ、そして、先進医療を提供することで地域医療をリードしていく香大病院の取組や特長を広くお伝えしたいとの思いから創刊したものです。

タイトルの「KUH」は“Kagawa University Hospital”の頭文字を取って名付けられました。お気軽に「くう～」と呼んでください。紙媒体は、タブロイドサイズで手に取りやすく、読みやすい形となっており、附属病院内はもとより、県内各所に設置しています。

WEB版は、病院HPから閲覧できますので、是非、ご覧ください。

(総務課)

香川大学医学部附属病院 > 病院紹介 > KUH 香大病院PAPER

<http://www.med.kagawa-u.ac.jp/hosp/about/kuh/>



- vol.1 2022年 秋・冬号
- 表紙
  - 特集 カゼってなんなん?
  - コジラせない!香大病院スタッフフォース
  - みんなの自己流カゼ対策法 アレってどうなの会議
  - 回心質問。それぞれの答えーあなたの言葉で看護師がわかる
  - いい音聞いたきました。藤通団長のやわらかインタビュー(第1回) 門脇則光院長・杉野野史副院長・榎川利子副院長
  - もしも高卒な医師が必要になったら? 呼吸器外科編/医学部NEWS
  - コラム「医療用語 日常会話に使ってみよう!」 「県内全域に20分で到達!ドクターヘリ稼働」
  - コラム「読めクスリ・聴くクスリ」 「香大病院を支える豊方さん」
  - 香大病院INFORMATION

Vol.2



## 海外学生留学報告会

2023年7月3日

今年に入り、学生の国際交流が徐々に復活の動きを見せています。令和5年3月にブルネイダルサラーム大学へ4年生2名、5月にイギリスのニューカッスル大学に6年生4名が短期留学を行い、その報告会が、医学部国際交流委員会により、臨床講義棟1階で実施されました。留学で得た貴重な体験が発表され、質疑応答では、来年度以降の留学を目指す学生から活発に質問が挙がり、医学部学生の留学への意欲の高さがうかがえました。



▲ニューカッスル大留学報告



▲ブルネイダルサラーム大留学報告

同時に来年の留学に関する説明会も実施されました。

讃樹会では、国際交流支援事業の一つとして学生の短期留学助成金を交付しています。帰国後には忘れずに申請して下さい。

この機会に、讃樹会シンボルフラッグを発表者演台の前に掲げさせていただき、お披露目できました。



## 特集 ～現役部員とOB／それぞれの西医体への想い～

### 『西医体4年ぶりの開催』

#### 「神鍋高原で熱く燃えたラグビー魂」

近藤 彰宏（平成22年卒・25期生）

私は2010年に香川大学を卒業し、卒後14年目を迎えております。現在は香川大学医学部附属病院の消化器外科で臨床・研究・教育に励んでいる毎日です。今でこそ「仕事が9割」の人間となってしまいましたが、学生時代の私はきっと今の自分を想像できなかったでしょう（笑）。決して現状に満足しているわけではありませんますます頑張っていく所存ですが、学生時代に戻ることができたなら、「14年後の君はよくやっているよ」と声をかけてあげても良いかもしれません。

さて、私は大学時代ラグビー部に所属していました。西医体は毎年異なる大学が主幹となり異なる地域で開催されますが、ラグビーは毎年兵庫県北にある神鍋高原というところで開催されています。毎年宿泊する施設も同じですので、学年を経ますと道のりまで覚えてしまっていたような気がします。1年生の時は香川大学が主幹の年でした。1回戦で敗退してしまいましたが、主幹であるため最終日まで残り運営に携わるとともに多くの試合を目にすることができました。やっぱりラグビーは面白いますます頑張ろう、と気持ち

を新たにすることは今でも記憶に残っています。ただどんなことでも勝負事に勝つというのは決して容易なことではなく、その後も1回戦敗退が続いていました。4年生の西医体の後に私の学年が幹部学年となり、主幹となった阪本君が勝つために必要なことをストイックに練習に取り入れて大変頑張ってくれました。そして良い後輩にも恵まれ、6年生最後の西医体で初めての1回戦勝利を手にすることができました。毎年悔し涙を流していましたが、勝って流した嬉し涙の味とあの日の気持ちは今でも忘れることができません。残念ながら2回戦は惜敗しましたが、一つの目標に向かってチームで一丸となって取り組んできたあの頃の日々は今も色あせず、当時の仲間は今でも大切な存在です。

今年は4年ぶりに西医体が開催されるとお聞きしました。後輩たちには「暑さ」を「熱さ」で吹き飛ばして仲間たちと是非素晴らしい経験をともにし、かけがえのない一生の思い出を作ってくれることを願っています。



2010年卒業アルバムより（前列ボールを持っているのが筆者）

## 久しぶりの西医体

香川大学医学部ラグビー部

6年 馬屋原真太

讃樹會の皆様、初めまして。香川大学医学部6年生の馬屋原真太と申します。

この度は4年ぶりの西医体開催にあたり、ラグビー部を代表して意気込みを書いてほしいというお話をいただきました。拙い文章になるかとは思いますが、ご一読いただければ幸いです。

私は、2018年に香川大学医学部に入学しました。新歓での先輩方からの熱い勧誘もあり、私はラグビー部に入部しました。

私は高校時代に緩い運動部に所属していたこともあって、入部当初、ラグビー部の体育会系でハードな練習についていけませんでした。先輩方が何故そこまで必死に練習するのか、私にはよくわかりませんでした。「西医体」という大会があるのは知っていましたが、その大会がそんなに大事なのか？何もこんな暑い中練習しなくてもいいじゃないか。そう思っていました。

迎えた西医体本番でその疑問は吹き飛びました。暑さで朦朧とする中で背中を叩いてくれる先輩。真横で歯を食いしばってタックルする同級生。きっと自分達と同じくらい厳しい練習をしてきたであろう対戦相手。

全てが輝いて見えました。

西日本の医学生たちが1年間積み上げてきた全てをぶつける場所として西医体がありました。あの日以来、私はラグビーの虜になりました。

西医体に向けてラグビーばかりしている私にコロナが襲いかかったのは2年生の冬でした。そこからは3年間連続で西医体が開催されず、部活動も色々制限がかり、焦った思いをしながら過ごしました。もう西医体に出場することがない

まま、卒業してしまうのかなと諦めていた最後の年、開催の連絡がきました。あの場所に最後に戻れると思うと、とても嬉しかったです。

もちろん自分も最後の西医体を思い切り楽しもうと思っていますが、ぜひ後輩たちにもその楽しさを知ってほしいという気持ちがあります。今や後輩たちのほとんどが西医体を経験したことはありません。彼らに、自分達が下級生だった頃に先輩方に見せてもらった素晴らしいあの景色を、今度は私たちが後輩に見せてあげられたらなと思っています。そして願わくば、その後輩たちが伝統を引き継ぎ、次の世代へと伝えていってくれたらこれ以上嬉しいことはありません。

現在、ラグビー部は3年間溜めてきたこの力を西医体に全てぶつけるべく、皆で練習に励んでいます。悔いのない結果になるよう、最後までしっかり走り続けたいと思っています。

最後になりますが、讃樹會の先生方におかれましては、引き続き、ご指導ご鞭撻をよろしく願います。讃岐の丘の益々のご発展とご健勝を祈念いたしましてご挨拶とさせていただきます。



「先日行われた練習試合の際の円陣」

## 私の西医体～20年以上前を思い出しながら～

平間（旧姓：合田）裕美（平成15年卒・18期生）

皆さま、こんにちは！平成15年卒でバレーボール部出身の平間と申します。現在未就学児～中学生までの3姉妹育児をしながらKKR高松病院泌尿器科の部長として働いています。当院では“女性患者さんが安心して受診できるように”をコンセプトとして、香川県内では珍しい女性泌尿器科専門外来を開設しており、口コミでの受診患者さんも増えてきました。泌尿器科患者さんの7割は男性というのが一般的ななか、私の診察対象は女性泌尿器科外来が全員女性なのはモチロンですが、一般泌尿器科外来でも8割以上が女性という特殊な環境で日々診療をしています。学生時代のことは思い出すことなく毎日が過ぎていたなか、4年ぶりに西医体が開催されるということで執筆依頼がありましたので、当時を振り返ってみたいと思います。

思い返せば私の西医体は波乱万丈でした。大学1年生の時はバスケットボール部と兼部していたため、バレーとバスケット両方の大会に参加し1週間以上を開催地の宮崎で過ごしました。宮崎滞在前半はバレーの応援と観光を満喫し、後半はバスケットの選手として試合に出場しました。前半の運動不足と食べ過ぎが祟って、バスケットの試合中はへとへとだったのを思

い出します。大学2年生では人数が揃わないという理由で出場せず、3年生から5年生までの西医体では3連覇を成し遂げました。連覇メンバーはほとんど変わっていないのに何故か6年生最後の西医体は初戦敗退してしまうというオチ付きで、選手としての最後の飲み会ではびっくりするほど泣きました。青春です。

西医体のもうひとつの楽しみは開催地での観光でした。観光する時間の確保は勝ち進むかどうか次第というところもドキドキではありますが、どのような結果になっても目一杯楽しめるよう皆でいくつかプランを立てたことも良い思い出です。

4年ものブランクとなると西医体経験の先輩方も少なくなり、学生さんたちは不安を抱えながら練習や交通・宿泊の手配など事前準備でお忙しい日々をお過ごしのことと思います。社会人になってからでは決して経験できないことだらけなので、皆さんにはぜひ楽しんで後悔のないよう参加してほしいと思います。

最後になりましたが、同窓会の皆さま、学生さんたちの益々のご活躍を心よりお祈り申し上げます。このような機会を与您にいただき感謝申し上げます。



土井顧問と医学科看護科のメンバーで集合写真（おそらく2000年頃の筆者が大学3年生時）  
筆者は最後列左から2番目

## “全力を出してくるので、応援よろしくお願いします。”

香川大学医学部女子バレーボール部

5年 茂木 貴慧



本年6月4日に行われた医系中四国大会にて優勝した際の写真

4年前の夏、入部して3ヶ月と少し、上級生に囲まれて出場した西医体は、思い返すだけでも申し訳ない程酷いものでした。セッターと息が合わず、アタッカーとしての役割を果たせませんでした。初戦敗退。不完全燃焼。当時のセッターとたくさん話して、来年こそは、と約束をしました。医学科のバレー部員の多くは、西医体を最終目標として練習しています。毎年、中止の連絡が来る度に、何の区切りもなく先輩方を見送ってきた悔しさを、大会に出場するどころか、一緒にバレーができなくなる悲しさを、募らせた4年間でした。

医学部バレーボール部は、医・看護・臨床心理が所属していますが、西医体は医学科のみしかエントリーができないため、チーム編成が大きく変わります。大学からバレーを始めた同学メンバーは見違えるように

上手くなりました。引っ張ってくれる後輩と頼もしい1年生に囲まれてバレーができていること、日々の練習が本当に幸せに感じます。まだ凸凹しているチームですが、同じ目標の下、練習を重ねてどんどん上手くなって、団結したチームになっていく像が思い浮かべられる素敵な仲間たちです。

私は、今回の西医体で引退しようと考えています。大学生活の中で、2回目にして最後の西医体。チームの目標は「西医体を優勝して全医体の出場権を得ること」です。悔いの残らないプレーをすること、勝ちにいくこと、大好きなみんなとの時間を思いっきり楽しむこと。

顧問を始め、苦楽を共にしたプレイヤー、支えてくれるマネージャーには、感謝してもし切れません。

全力を出してくるので、応援よろしくお願いします。

## 「喜びと悲しみ」

福田 恒輝（平成12年卒・15期生）

「上マークの回航順位をお知らせ致します…1位香川大学、2位神戸大学…」

「いよっしゃー！」

入部したての新人部員は、海上で戦う先輩たちの暫定順位を陸上（丘）で聞く事になるのですが、その順位が放送され、ハーバー中に響き渡るのを今か今かと待っています。ヨット競技は車のレースと同じで順位を競う競技です。先輩たちの順位が高いと、その都度、丘で待っている部員たちのテンションは爆上がりとなり、冒頭のような氣勢が上がります。その後、大学の名前が入ったポロシャツを着た部員たちはハーバー中を意味もなく歩き回ったりして、背中の中の大学名を誇示したものです。逆に順位が低いと日陰でじっとしていたりして。

卒後10年間程度は毎年のように西医体が開催される各地のハーバーへ応援にっていました。出艇を目前にした選手達が緊張の面持ちで円陣を組み、エールを贈り合うのですが、その中に混ぜてもらって肩を組むと、彼らを応援する気持ちが心からわいてきたものです。実際に出走する船にそっと触れたりなんかしながら、心の中で「頼むぞー。一番早く帰って来い！」と念じてみたり、落ち着かない様子 of 選手たちの横顔を遠くから眺めたりしていました。

卒後20年が経ち、自身のクリニック開業もあり、西医体からも足が遠のいた矢先、個人的に最恐の先輩かつ、当時のOB会長である牛山さん（牛山クリニック院長）から「次お前ね」と言い渡され、ヨット部伝統の絶対的主従関係から条件反射のように首を縦に振った結果、OB会長に就任してしまった次第です（現在に至る）。

「西医体で優勝したらヨット買ったる！」開業が軌道に乗りつつあった2018年。OB会で調子に乗った僕はかわいい後輩たちの前でそう宣言しました。気持ちのどこかでは「ま、無いかな…」と思いつつも、実際そうになったら嬉しいな、ぐらいの軽い気持ちでいたのですが、翌年の夏に後輩たちがとても良い意味でやらかしてくれ（優勝＝喜び）、○百万円をヨット部に寄付させていただきました（散財＝悲しみ）。

今年の夏はコロナが明けて久しぶりの西医体開催とともに、OB総会を開催予定です。後輩の副会長、山上佳樹（小豆島で整形外科を開業予定）とともに、これまでたくさんの喜びと悲しみを共有してきた仲間たちと再び円陣を組み、お互いの無事を喜び合いたいと思っています。



2019年。西医体で総合優勝した年のOB会で。喜びと悲しみが入り交じり、回りの表情との間に温度差が。（右端が筆者）



## 「支えてくれる人」

香川大学医学部ヨット部は現在7人という少人数で活動しており、普段の練習は香川大学本学ヨット部と協力しながら行っています。セーリングを通じて自然に触れ豊かな心身を育むこと、仲間と共に過ごし大学生活を実りあるものにするをモットーに活動しています。

ヨット部は2019年に開催された西医体で総合優勝しました。当時1年生

だった私は、先輩方が優勝する姿を見て、将来先輩方のように活躍したいという思いを持っていました。しかしながら、Covid-19の影響による部活動の制限が出て、状況が一変しました。新歓が満足にできず部員は減少し、西医体をはじめとする各種大会の中止が相次ぎました。中でも部員減少は深刻で、今回の西医体は1艇のみの出場で精一杯な状況です。このような厳しい現状で、上級生としてヨット部を引っ張っていくことを辛く思っていた時期もありました。そんな中でヨット部を続けてこられたのは、いつも応援し、支えてくれる周りの人たちの存在でした。ヨットは1人で

は出来ません。一緒にヨットに乗ってくれる人、救助艇から練習を見守る人など、サポートが必要です。また部員だけでなく、顧問の日下先生をはじめとするOB・OGの先生方、大学職員やハーバー関係者の皆様など本当に多くの方のご支援やご協力のおかげで成り立っています。私たちヨット部の強みは、部員が少ない分、部員の仲が良いこと、部を支えてくださる方々に恵まれていることだと思っています。今回、ようやく西医体が開催されることになりました。西医体では日頃から応援して下さる皆様への感謝も力に変えて、まだまだできるところをお見せしたいと思っております。皆様がこの文章を読んでくださる頃には西医体は終わっていると思いますが、ヨット部が代々受け継ぐ、諦めない心を大切に、活動していく所存です。

最後になりましたが顧問の日下先生、OB・OGの先生方、香川大学の皆様、ヨット部をご支援いただき本当にありがとうございます。部活動を通して、ヨットの楽しさはもちろん、部の運営など様々なことを経験し、学ばせて頂いております。この場をお借りして感謝申し上げます。しばらくは細々と活動していくことになってと思いますが、今後ともよろしくお願いたします。拙い文章でしたが、最後まで読んでいただきありがとうございました。

香川大学医学部ヨット部

5年 松原 佑樹



レース中の風景 (31108が医学部ヨット部)

活動の風景  
(香川大学本学ヨット部と共にロープワークの練習中)

## //// 第12回 ////

## ～香川大学医学部讃樹會同窓会名誉会長による関連病院訪問記～

香川大学医学部医学科卒業生は3719人となり、1000名以上が県内で医療に貢献しています。一期生卒業後37年が経過し、関連病院も数多くなりました。そのうち基幹病院にも多くの医師が派遣され中心的な役割を担っています。

当企画は、基幹病院を中心に、その病院の特色、あるいは病院長の医療に対するお考えを、濱本が直接病院長を訪問しインタビューを行うものです。今回は、2023年6月21日におよそ1時間、香川県厚生農業協同組合連合会 滝宮総合病院にお伺いし、井上秀幸病院長にお会いして、卒業生の進路等に役立つお話を詳しくご紹介いただきました。

名誉会長 濱本龍七郎

# 【香川県厚生農業協同組合連合会 滝宮総合病院の沿革・歴史】

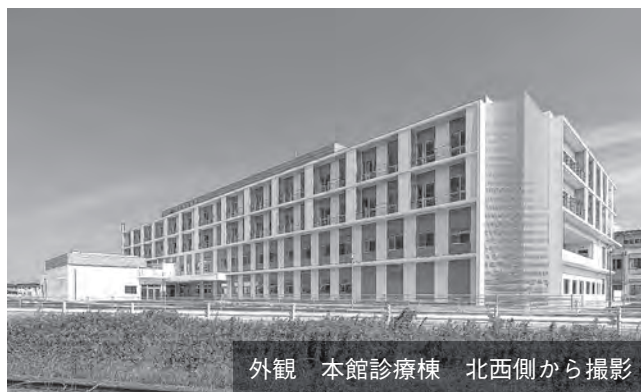
病院長 井上 秀幸



外観 正面玄関 西南側から撮影

滝宮総合病院の前身は、香川農業会滝宮病院と称し、農村および地域住民の健康と生命を守る医療機関として、昭和19年4月に綾川町陶に発足し、昭和22年4月に現在地に移転新築、戦後の混乱期の当地域の医療に貢献してまいりました。

その後、昭和23年8月15日滝宮病院と名称変更し、香川県厚生農業協同組合連合会に移管され、病床数を104床としました。昭和55年には200床に増床し、農業者健康管理センター（現在の厚生連健康管理センターかがわ）を併設、健診から治療まで対応できる施設に整備しました。平成7年には輪番制2次救急病院に指



外観 本館診療棟 北西側から撮影

定され、病床も253床（内結核病床40床）迄増床、平成12年には訪問看護ステーションを併設し在宅医療への取り組みを開始しました。平成23年3月からは病院再開発に着手し、平成24年8月本館（診療棟）、平成25年1月健康館、同年11月にグランドオープンし、今年で10年目の節目を迎えました。

病院再開発後は、地域包括システムへの貢献を担うべく、平成25年から平成30年にかけて急性期一般病床を回復期リハビリテーション病床や地域包括ケア病床に段階的に転換し、現在、急性期一般病床98床、回復期リハビリテーション病床43床、地域包括ケア病床46床、人間ドック4床、計191床で『患者さまの立場で分かりやすく優しい医療の提供』を目指し、地域医療に貢献すべく取り組んでいます。

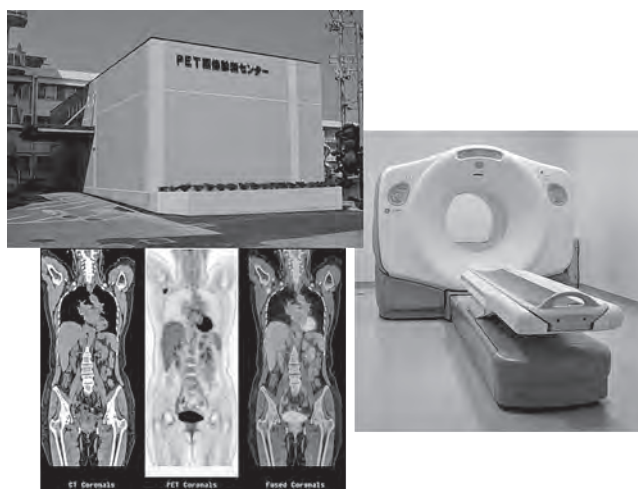
### 【病院機能】

医療事業は、香川県中讃医療圏における2次救急機関として医療提供体制の充実に努めており、特に新生物（悪性腫瘍）（17.8%）、外傷等（15.3%）、消化器疾患（13.4%）、循環器疾患（12.4%）に対する治療実績が多くなっています。

市町村患者の分布をみると県南中央部における唯一の総合病院であることや、平成17年4月に当時県内で初めてとなるPET-CT装置を導入したこと、平成24年8月には四国初となる強度変調放射線治療器の導入など



強度変調放射線治療器 TomoTherapy



PET-画像診断センター



外来待合・ロビー

高精度の医療機器による治療・検査を行う機能等から、町外患者の利用率は入院患者で67.7%、外来患者で60.3%と広範囲にわたっています。

新型コロナウイルス感染症への対応では、令和2年8月受入協力医療機関、10月診療検査機関、令和4年10月重点医療機関となり陽性患者や疑い患者の診療に寄与しています。

健康管理事業は、健康管理センターかがわと病院での施設健診と併せて、生活習慣病健診車による巡回健診を展開し、生活習慣病の早期発見に努める他、ヘリカルCT検診車による肺がん検診やPET-CTによるがん検診にも取り組んでいます。また、医師、コメディカル職員の派遣によるデリバリー講演や公開講座等の健康セミナーの積極的な開催や機関誌等を活用した医療情報の発信を行う等、健康啓発活動に注力しています。

病院併設の訪問看護ステーションでは、病院から在宅へのスムーズな移行など在宅後方支援を担当しています。また、ケアマネジャーを配置し、ケアプラン作成など居宅支援も実施、在宅患者への訪問診療も行う等、地域住民の高齢者福祉に寄与しています。

**【香川大学医学部、医学部附属病院との連携】**

令和5年4月現在で、大学医局からの派遣医師は18名の常勤医が在籍しており、寄附講座からの派遣医2名の他、多数の非常勤医の派遣を受けています。また、

医学部からは、医学実習生や初期、専門研修プログラムでの卒後臨床研修センターや専門プログラムの協力病院として、高松地域以外での症例経験を積める医療機関としての役割を担っています。



前列左より 濱本龍七郎 讚樹會名誉会長、井上秀幸 病院長  
後列左より 常森寛行 病院長補佐、岡本佳樹 病院長補佐、野間聖子 放射線診断科部長、  
合田真由美 病院長補佐、石井知也 病院長補佐



## 学生短期留学報告

留学先： Universiti Brunei Darussalam

留学期間： 2023年2月3日～3月10日

### 4年 村上 祕奈

#### ① 学習状況について

大学内では言語は英語のみでした。教授や研究生との会話も英語で話し、最初はスピードの速さと専門用語の英語の知識不足により、ついていくのに必死でした。また、現地に行って、一番感じたのは、医学の知識不足についてです。研究内容がゲノムに関するものであり、生物選択ではなかった私にとって、ゲノムについて学んだのは、一、二年生の生物学や分子生物学のみであり、現地についてから、とにかく日本のゲノムの参考文献を読み、理解することに努めました。また、他の研究では癌細胞のバイオマーカーについての研究を行い、こちらあまり理解がなかったため、日本にいる友人に参考書を送ってもらうなどして、理解していきました。研究を行う前に、日本でまず、研究内容を詳しく聞く必要があったと思います。

また、現地ではPBLにも参加させていただき、現地の学生のレベルの高さを実感しました。日本とは違い、臨床的な学問も学年が低い時から学ぶ現地でのシステムにより、自分よりも学年の低い子たちがついこの間私たちが習った疾患について、自ら教授の前で説明し、他の学生とディスカッションする姿はとても刺激的でした。このアウトプットする機会は、日本にはなく、自分の知識を人に話すことで、頭の中も整理され、知識の定着にも繋がりが、さらに人前で話す経験にもなるため、将来のプレゼンテーションにも役立つと



ラボでの研究をしている様子



5週間一緒に研究した教授と研究員と共に  
(筆者 左から3番目)

考えられ、ぜひ日本でもアウトプットする機会がほしいと感じました。

#### ② 生活状況について

現地では、大学の寮で生活をしていました。あまり環境は良くなく、水道水が茶色く、臭いがしたり、外は30℃近いにも関わらず、メインの部屋のエアコンはつかなくなったり、シャワーが急になくなったりとか慣れないことが続きました。特に一番衝撃的だったのは、蟻が頻繁に発生することです。部屋のテーブルやキッチン、さらには冷蔵庫の中までも発生しており、酷いことに自分のベッドの上を数十匹の蟻が這っていた時は、絶望でした。建物自体が古く、蟻にとって何か香ばしいものがあるとすぐに寄ってくるらしいです。日本に帰ってきてからもしばらくは、黒くて小さなものを見かけると、フラッシュバックする程でした。蟻対策は必要だと感じました。

食べ物はとても美味しかったです。中華料理、海鮮、鶏肉の料理が多く、日本食に馴染みがある味付けで、食事がとても楽しかったです。寮での生活は、現地の調味料などを使い、自炊することもしばしばありました。

#### ③ 後輩へのアドバイス

上にも述べたように、まず出国する前に研究内容を詳しく聞いておくことをお勧めします。また、生活面においては、虫対策のものを持参することをお勧めします。現地でも買えますが、日本の方が安心しますし、使いやすいです。

#### ④ その他

思い通りにいかないことがたくさんありましたが、一つ一つ解決していき、乗り越えていくことで、医学における知識やプレゼンテーション能力などに限らず、自分自身とても強くなったと思います。たった5週間でしたが、今までの人生で最も濃く、学びに溢れた5週間でした。この様な経験をできたことに心から感謝します。本当にありがとうございました。

オフィスのみならず



## 4年 蓮池 優菜

## ① 学習状況について

UBDの大学院生とともに研究室において、癌細胞の培養、Transfection、Optimizationを行った。Whole Exome Sequence (WES) の原理を学び、実際にWESで乳がんのsampleを解析した遺伝子情報を用いて1つの遺伝子を選び、その遺伝子が乳がんにどう関与しているのかについて書かれた論文をまとめた。また、現地の医大生のPBLを見学し、日本とは異なる医学教育を体験した。そして、最後にUBDで行った実験の結果をPresentationで発表した。



最終日のpresentation

## ② 生活状況について

寮での生活で、UBDと寮は歩いて行ける距離にあった。寮にはFOOD COURTがあり、金曜日の12時から14時までと土日以外は利用することができた。寮から近くのスーパーに1、2時間に1度ほどシャトルバスが出ており、食料品や生活用品はここで買うことができた。一緒に研究を行う大学院生がとても親切にお世話をしてくれて、日常生活から観光や遊びまでいろいろと助けてくれた。また、体調を壊した時には、大学院生にクリニックに連れて行ってもらうこともできた。

## ③ 後輩へのアドバイス

勉強面においては、基本的に英語なので英語を話す練習を日本でしていた方がいいと思う。また、現地でどのような研究を行うのか事前に先生に聞いてもらい、ある程度理解してから行った方がいい

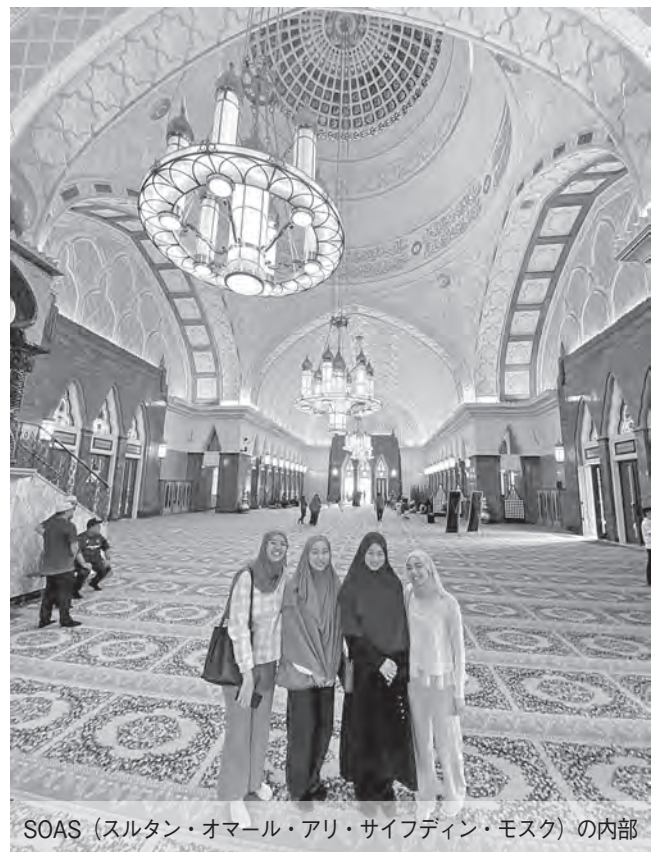


ブルネイno.1の日本料理店 “Kaizen sushi”

と思う。生活面においては、ブルネイは真夏で、急に季節が変わり、私自身体調を壊してしまったので、薬は多い目に持って行った方がよく、保険にも入るべきだと思う。また水道環境が良くなく、湿度が高いので、持っていく服は捨てるでもいい服で、乾きやすいもののほうがいい。あと、金曜日の12時から14時まではお祈りのため、全てのお店が閉まってしまうので昼食を買うのを忘れないようにしたほうがいい。お土産にたくさんお菓子を持って行ったがあまり使うことがなく、イスラム教なのでハラルフードかどうかを気にする人もいたので、食べ物よりも日本の雑貨などを持って行った方がいいと思う。

## ④ その他

楽しいことだけでなく、慣れない生活環境で大変なこともたくさんあると思いますが、絶対にいい経験になると思うので頑張ってください。

Empire hotelでafternoon tea  
(左端が筆者)

SOAS (スルタン・オマール・アリ・サイフディン・モスク) の内部



## 教室便り

令和5年7月入稿

### 神経機能形態学

令和5年度の神経機能形態学は、三木（教授）・鈴木（准教授）・太田（助教）・大給（助教）のフルスタッフで講座を運営しています。加えて、大学院生（現在2年次）1名が在籍しています。2年前から三木は医学部長の任についており、講座の用務は鈴木が仕切っています。教育では、コロナ禍が明けた今年度からは、従前通りの本格的な対面講義と系統解剖実習が再開できることに教員はワクワクしています。現在、各学年数名の学生が研究、国試勉強、喫茶に出入りしています。今年の解剖学会（全国集会）で3人の学部学生が発表しました。これから期待の出来る人材です。

これまで多くの学生が、当研究室で学んでくれました。忘れ得ぬ学生がいます。現在は卒業6年目の第一線で活躍する臨床医です。苦しんでいた学生時代にお世話になったこと、いま自分が医師として働いていることの感謝として、卒業後欠かさずことなく挨拶に訪ねてくれる卒業生がいます。心から嬉しく思っています。学生を教育する立場にある私自身の身の上にただただ感謝するばかりです。



卒業生から頂いたお菓子。私にとっては「気持ちが伝わってくる」特別なものです。（三木 記）

### 組織細胞生物学

私、荒木が組織細胞生物学の教授となり17年目、定年まで残り1年半となりました。教育分担やスタッフなどの状況は昨年となら変わっておりません。研究は、蛍光タンパク質融合機能分子を発現させた生きた細胞でのバイオイメージングやタンパク質活性のオプトジェネティクス光制御を用いて、エンドサイトーシスや細胞運動の分子メカニズム解析を続けています。研究室には学部学生が多く出入

りしており、和やかな雰囲気です。同窓会員の皆さんも気楽に遊びに来てください。顕微鏡技術を教えて欲しい人は今のうちにどうぞ。

Instagram (microscope\_lab.kagawa)、Facebookでも情報発信しています。昨年は、医学部キャンパスで日本解剖学会中四国支部学術集会を開催しました（下写真）。

（荒木 記）



### 分子神経生物学

2013年8月に山本が着任し、名称が脳神経生物学から分子神経生物学に変わって10年目を迎えています。現在スタッフ2名が、2名の大学院生とともに、医局の先生方との共同研究を進めながら、教育・研究に取り組んでいます。

当研究室では自閉スペクトラム症・統合失調症などの精神神経疾患や、アルツハイマー病などの神経変性疾患の分子病態の解明と、虚血性神経細胞死の分子機序の解析を主目的に、我々自身が世界に先駆けて見出し、その機能を明らかにしてきた因子群の解析を中心に、研究を進めております。昨年度は、我々が樹立したマウスモデルの解析から、いわゆる発達障害のカテゴリーに括られる疾患であっても、その機序によっては、成人期における適応外処方薬の投与で改善し得ることを示唆する結果が得られました。実際の医療に結びつけていくにはまだまだ多くのハードルがありますが、少しでも近づけていけるよう努力しているところです。

小さな研究室ですが、オリジナリティーに立脚したアイデアを振り所に、基礎・臨床の先生方との共同研究も発展させつつ、教育・研究を進めています。（山本 記）



## 自律機能生理学

自律機能生理学は、基礎研究成果をベッドサイドへ展開する“トランスレーショナル生理学”を旨に基礎研究に取り組んでいます。2023年度から研究員を1名増員し、教授1名、准教授1名、助教2名、研究員2名、大学院生2名、事務補佐員1名の体制で生理学の研究教育に取り組んでいます。

研究の主要なテーマは、血液凝固系による老化メカニズムの解明とその制御です。加齢とともに凝固活性が亢進することはよく知られていますが、逆に凝固系の亢進が老化を促進するとする仮説を、動物実験と培養細胞実験により検証し、新しいアンチエイジング戦略を提案することを目指しています。

教育では、生理学Ⅱ(医学科2年次)、生理・薬理実習(医学科3年次)と研究室配属が担当科目です。研究室配属の最終日に開催する成果発表会では、実験方法の原理や得られた結果の論理的解釈についてじっくりと諮問することで、厳密な科学的思考法の育成を実践しています。この思考法の鍛錬は、卒業生がいずれの道を歩んだとしても、医療プロフェッショナルの基盤として生涯役に立つことを期待しています。(平野 記)

## 薬理学

同窓の皆さまにおかれましては、平素より大変お世話になっております。薬理学教室の現状について報告申し上げます。

薬理学教室のメンバーは以前にも増して国際色が豊かとなり、教員3名(うち外国人1名)、研究員4名(うち外国人3名)、他講座から来ていただいております方も含めて大学院生7名(うち外国人5名:バングラデッシュ・中国・ブルンジ)に加え、実験補佐員3名、秘書3名、医学部生数名の研究体制となっております。教室の人数自体は増えておりますが、香川大学が推進する働き方改革を先導してワークライフバランスを重視しております。また、ダイバーシティを最重要課題とし、昨年度はコロナのため来日が見合わされた米国カリフォルニア大学からの短期留学生に加え、タイ国とブルネイ国から数名の留学生の受け入れが決定しており、多様性をさらに強化する予定にしております。

研究活動につきましては、科研費基盤B・挑戦的萌芽研究に加え、2023年度にはAMEDとNEDOからの大型外部資金を獲得することができ、治療ワクチンの開発臨床応用に向けたサルでの前臨床試験や遺伝子改変マウス・ラットや肺魚・イルカに至るまでの様々なプロジェクトを展開しております。さらに、JAXAとの共同研究においては、ついに

## 自律機能生理学 Cardiovascular Physiology



トランスレーショナル生理学  
～基礎研究成果をベッドサイドへ～

2025年度以降に国際宇宙ステーションにおける宇宙飛行士での臨床研究が決定いたしました!

教育活動につきましては、対面の講義と実習が再開されましたが、一部は英語で実施しております。また、社会貢献活動としては、引き続き市民公開講座や科研費のリモート・レクチャーを実施しております。以上の薬理学教室の具体的な活動内容につきましては、是非、リニューアルしたホームページをご覧ください( <http://www.kms.ac.jp/%7Eyakuri/> )。

常に社会への貢献を念頭に、日々精進して研究・教育を進めて参る所存ですので、引き続き何卒宜しくお願い申し上げます。(西山 記)

## 生化学

生化学研究室では、上田夏生教授、宇山徹准教授、佐々木すみれ助教の3名の教員によって生化学の教育と研究を実施しています。教員以外では、1名の大学院生(Sikder氏、バングラデシュ出身)と1名の事務員が在籍しています。昨年度はKhaledur氏と綾木氏の2名の大学院生が課程を修了し、博士(医学)の学位を取得しました。Khaledur氏はバングラデシュに帰国してジェソール科学技術大学の講師に復職し、県内の勇心酒造株式会社からの社会人学生であった綾木氏も、大学で得た知見を活かして同社の研究所で活躍しています。

学部教育については、医学科では2年次の「生化学」の講義・実習を始め、早期医学実習や医科学研究等の研究室配属科目、臨床心理学科では2年次の「生化学・分子生物学入門」を担当しています。昨年度から留年生の希望者を「早期医学実習Ⅱ」で受け入れており、生化学に対する苦手意識を克服し、より身近に感じてもらえるような取り組みを始めました。昨年度は受講生全員が進級できたこともあり、今年度も引き続き同様の取り組みを通じて留年生の学習を支援しています。また、所属大学院生が外国人留学生であることから、学部学生への講義や実習の一部を英語で実施しています。

研究では主に2つのプロジェクトに取り組んでおり、「生理活性脂質であるN-アシルエタノールアミンの生理機能解析」と「脂質代謝酵素であるPLAATファミリーの機能解析」を展開しています。PLAAT分子群の遺伝子欠損マウスを用いた最近の解析から、PLAAT1やPLAAT3は肥満との関連が深く、特にPLAAT1を欠損させることにより、高脂肪食の摂取で生じる脂肪肝を改善できることを世界に先駆けて報告しました。また、PLAAT5が精巣においてN-アシルエタノールアミンを合成する主要な酵素であることも見出しました。6月にカナダ・トロントで開催された2023年国際カンナビノイド学会でこれらの成果を発表し、高い評価を得ることができました。この分野は未解明なことが多く残されており、引き続き新しい知見を報告できるよう、特に遺伝子欠損マウスを用いた生理機能解析を発展させる予定です。

最後に、上田教授が10月から香川大学長に就任すること

となり、9月末をもって医学部を退職します。上田教授は平成13年に本講座に着任以来、約23年に渡って医学部の教育・研究に尽力され、大学院では15人の大学院生の学位取得を指導されました。その間に副学部長（医学科教育担当、学務委員長）や医学部長を歴任するなど、学部運営にも貢献されました。今後は学長として、香川大学のさらなる発展に向け活躍されることを祈っております。（宇山 記）

## 医用化学

医用化学教室では、和田教授と栗原助教が中心となり、総合生命科学講座の中北慎一准教授の協力を得て医用化学Ⅰ、医用化学Ⅱ、全学共通教育科目、および大学院科目の教育等を担っています。コロナ禍も漸く収束に向かいつつあり、対面での講義や実習を徐々に再開しつつありますが、単にコロナ禍前に戻すのではなく、これまで培ったオンラインコンテンツ等を活かしつつ、より効果的な学修の形の模索を継続しています。

研究面では、和田は引き続き医薬品合成や水素製造用の新触媒開発や、分光イメージング技術開発に取り組んでいます。令和4年度基盤研究（B）代表に加え、計3件の基盤研究（B）課題の分担を担っており、研究にも忙しい日々を送っています。栗原助教は引き続きドラッグデリバリーや分子プローブ分野の研究を推進しています。

和田は引き続き医学部国際交流委員会委員長、および学長特別補佐として国際交流業務を担当しています。コロナ禍の影響は甚大でしたが、英国への派遣がいよいよ本格化するとともに、医科学研究でのブルネイ・ダルサラーム大学への派遣が再開しました。海外の学生の受入れも再開されています。さらに、JICA等との連携による様々な国からの研究員の受入れも始まりました。

さらに、医学部再開発工事が令和5年8月から始まることが決まり、現在仮住まいとなる部屋への引っ越し作業を進めています。再開発を経てさらに香川大学医学部を盛り上げるべく頑張りますので、讚樹會の先生方にはどうかご支援くださいますよう、よろしくごお願い申し上げます。

（和田 記）

## 分子細胞機能学

分子細胞機能学では小川崇 助教と野中康宏 助教の2名の教員と事務職員1名の計3名が在籍しています。昨年度までで、当研究室の中村隆範教授が定年によりご退職なさったため、現在は少数ながらも研究室を運営しております。教育面では主に内分泌学講義・実習を担当しております。本年度から久しぶりに対面での講義や実習が再開され、特に実習では内容を厳選しわかりやすく改良いたしました。

研究面では主にガレクチン等の糖鎖認識レクチンの生理機能について研究室員で協力し、学内外との共同研究に支えられながら研究を進めております。私自身も正常消化管及び大腸がんにおけるガレクチン-4の機能に興味を持ち研

究を行っています。正常機能は主に当研究室の実習でも用いているアフリカツメガエルを用いて、がん研究については主に大腸がん細胞株を用いて、それぞれガレクチンの未知なる機能を明らかにしていこうと日々取り組んでおります。本年度、ツメガエルを用いたガレクチンに関する最近までの成果を、Trends in Glycoscience and Glycotechnology誌に投稿し、最近受理されました。さらにガレクチン-4の変った機能も明らかにしつつあり、現在獲得している科学研究費と学内の研究推進予算（萌芽）によって地道に研究を推進し、論文としてさらに発信していきたいと考えております。来年度からは講座自体が新しい体制になる予定ですが、今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。

（小川 記）

## 医用物理学

医用物理学教室では久富が学部教育や研究を進めています。久富は当教室で准教授として着任し13年目を迎えます。まだまだ発展途上で、工夫と努力を重ねているところです。COVID-19流行も一定の収束が見えたようで、以前のようなざわざわした対面講義が再開しました。1年次の医学科学学生に物理学の講義を行っています。私自身は物理学を学んだあと医学分野で研究を行ってきており、両方の立場で考えて講義することを心掛け、将来医学を目指す若者に少しでも役に立てばと考えています。

研究面ではPETやSPECTを中心とした医用画像解析を進めています。具体的には画像の定量化、撮像時間の短時間化、撮像法の非侵襲化などを行っています。附属病院の先生方や技師さんにご協力いただき研究を楽しんでいます。最近ではAIを適用し、画像のノイズ除去、定量画像計算の可能性、モダリティ間での画像変換などに挑戦しています。機会があれば他のモダリティでの解析にも着手したいと考えています。

他方で、医学部再開発にあたり、教室内の古くなった機器等を一扫し、新たな気持ちで未来に向けて進んでいく所存です。

（久富 記）

## 腫瘍病理学

腫瘍病理学教室は、昨年度から長尾助教が新メンバーとして加わり、新体制で教室運営を進めております。研究面では、老化、テロメア構造異常、染色体異常、核膜整合性異常を伴う様々な癌（膵臓、胃、大腸、肝臓、肺、乳腺、腎臓、脳、骨軟部）の研究や、オートファジーによる細胞死制御研究を進めています。また、病理学研究のDX化に伴い、スライドスキャナーNanoZoomerやAI機能搭載解析ソフトHALO AIを導入し、人工知能による病理解析の効率化と、前がん病変の可視化を目指した研究を展開中です。4月からは、東和輝さんが基礎研究医プログラムに採択され大学院生として加わり、今後の研究活動の一層の飛躍が期待されます。診療面では、病理解剖のclinicopathological

conference (CPC) やキャンサーボードを通して、正確で専門性の高い病理診断や臨床医との協力体制を大切にしていきたいと思います。教育面では、各学年の学生研究員を多数迎え、病理診断や研究の指導を行っています。医学科6年の久保君はCPCで症例発表を行いました。学生実習では、先のNanoZoomerで取り込んだバーチャルスライド画像をWeb共有し、対面型授業が困難な状況下においても病理学実習の質や効率性の向上を図りました。引き続き、大学院生、研究生を募集しています。ご興味のある方は是非当教室にご連絡ください。(水津 記)

## 炎症病理学

炎症病理学教室では、上野正樹教授の元、千葉陽一准教授、宮井由美助教と同じく助教の村上龍太の4名で教室を運営しています。本学部名誉教授であり客室研究員の阪本晴彦先生および協力研究員の松本晃一先生にもご助力いただき、また大学院4年次生となった若松さんは精力的に成果をあげ、発表しています。

学部教育では実習を大切に、バーチャルスライドも併用しながら病理学をなるべくわかりやすく伝えていこうと努めています。また大学院では臨床講座から多数の医師を受け入れており、現在は小児科・小児外科・麻酔科・周産期学婦人科学の先生方と共に研究を行っています。近年は研究の補助としてAI技術を導入し、病理画像解析や統計処理などを始めました。病理診断や大学病院での病理解剖およびCPCの実施、地域の病院での診療協力等、診療にも力を入れております。

このように順風満帆と言っても過言ではない、素晴らしい状況です。一層励む所存です。(村上 記)

## 免疫学

免疫学講座がスタートして12年度目となりました。教員2名、技能補佐員1名、事務補佐員1名で、研究・教育を進めています。助教1名が欠員中です。大学院生の高尾先生は令和4年12月に学位を取得し、現在は県外で活躍されています。令和5年度の前期から対面講義の体制に戻りました。免疫学実習は、COVID-19に対応するために見直した内容で実施しています。令和4年度の選択科目として、医学科3年生2名(課題研究)、2年生1名(早期医学実習Ⅱ)の合計3名が本講座を訪れ、経験を積みました。学生諸君の将来の研究に繋がれば良いと思います。研究の特色としては、樹状細胞の活性化メカニズムの解明、希少糖による免疫機能の調節などが挙げられます。新しいユニークな研究成果を積み上げていく所存です。今後ともよろしくお願いたします。(星野 記)

## 国際医動物学

2009年に新井が准教授として着任してから14年が経ちました。助教の補充がないため教員1名体制が続いています。新型コロナウイルス感染症の5類移行に伴い医動物学講義は対面授業再開となりましたが、実習に関しては新井ひとりでは安全に実施することが困難であるため、コロナ禍での実習で採用した、標本の顕微鏡観察動画を視聴してスケッチする形式で実施しました。教育面では主担当の医動物学のほかに、1年次生対象の医学概論のコーディネーターや、同じく1年次生のチュートリアルの運営に携わっています。研究面では共同研究案件として、薬剤耐性マラリア原虫の蚊体内ステージにおける発育動態を調べる実験を行いました。寄生虫・衛生動物関連のコンサルテーションでは、マダニ同定依頼、鞭虫症、蟯虫症などの症例に対応しました。コンサルテーション対応を担える後継者の育成が望まれます。(新井 記)

## 分子微生物学

分子微生物学教室は教員3名、事務補佐員1名、技能補佐員2名で微生物学の教育研究を行っています。昨年度から国費留学生2名が新たに加わり、大学院生4名とともに、元気に研究に取り組んでいます。教育面では3年生の微生物学の講義および実習、4年生の統合講義「感染症ユニット」を担当しています。臨床心理学科2年生の「微生物学・医動物学概説」の講義も担当しています。将来、感染症診療に当たる際に必要となる微生物の基礎知識や臨床的な重要項目を着実に習得できるよう教材の改良などに努めています。研究面では腸内フローラの破綻と健康維持に関する研究を行っています。次世代シーケンシスによる腸内フローラの解析が容易になったことで、腸内フローラと疾病との関連についての研究が活発に行われています。当教室でも新しい解析技術を取り入れ、腸内フローラ研究をさらに推進し、社会に還元できるような研究成果を発信していきたいと考えています。(桑原 記)

## 衛生学

衛生学教室は准教授・宮武と助教・鈴木の2人で構成しています。今年度は5名の大学院生と共に一緒に楽しく活動しています。宮武先生の温かな指導の下、昨年度は17本の論文が国内外の学術誌に掲載されました。

教室の研究は、メタボ、2型糖尿病、慢性腎臓病の生活習慣改善支援に加え、行政と協同で子どもの非認知能力向上事業や小中学校にネット・睡眠関連の調査をした上で啓蒙活動も行っています。また、大学教育基盤センターと英語学習プログラムの作成に関する研究も行い、サテライトセミナーも積極的に実施しています。

三木町との補助事業である「健やかあすなろプロジェクト」の一環でオンライン技術を用いた子育てセミナーを毎

月1回、地域の小中学校と連携しながら不登校児のためのフリースペースを毎週2回開催し、保護者の相談にもなっています。今後も引き続き、教育、研究、社会貢献等を積極的に進めていきたいと思っています。(鈴木 記)

## 公衆衛生学

スタッフは教員3名(平尾、Ngatu、神田)、事務補佐1名、大学院生は3名です。昨年に引き続き、多彩なバックグラウンドを持つ者が在籍しています。教育では久しぶりに対面授業が再開しました。満員の講義室における授業、社会医学実習におけるディスカッション、他施設への訪問など、賑やかな大学が戻ってきました。また香川県と共同で行っている「公衆衛生トークセミナー」も継続しており、国内からユニークなゲストを招いて、学生との質疑、相談等を行っています。引き続き、社会医学を目指す学生、若手医師の育成を続けていきます。学術活動としては、香川県小児生活習慣病健診、高松市健康都市推進ビジョン評価事業をはじめとする地元密着型の調査・研究、メタボ対策のためのサプリメント開発、がんサバイバーの労働生産性、緩和ケアにおける鍼灸治療の効果に関する研究などに取り組んでいます。現在医学部では、インドとの保健医療協力を模索していますが、微力ながらお手伝いさせていただきます。(平尾 記)

## 法医学

2022年度は学会も以前の状態を取り戻しつつあります。6月に開催された第106次日本法医学会学術全国集会(名古屋)で、ジャーナル、竹居、木下が、7月の日本在宅医療連合学会大会(神戸)では木下が、9月の日本法医学病理学会(横浜)では竹居が、10月の日本法医学会学術中四国地方集会(徳島)では竹居と木下がそれぞれ発表しました。また6月には教室員の協力の下、香川大学三木キャンパスにて日本法中毒学会第41年会を開催することができました。

教育に関しては、8月末からの法医学の系統講義を対面で実施しました。実習は縮小して演習のみ実施しました。

人事面では、2022年4月に助教の竹居セラ先生が加わりました。また9月から7か月間、科目等履修生として多田幸右さん(高松海上保安部)を受け入れました。剖検実務・検査に関しては、教室員全員で協力して行っています。今後とも、讃樹会の先生方には一層のご支援を賜りますようお願い申し上げます。(木下 記)

## 医学教育学

医学教育学講座の近況をご報告申し上げます。

新型コロナウイルス感染症もようやく2類感染症から5類感染症に移行するに伴い、ようやく香川大学医学部においても通常の対面型授業が再開できるようになりました。

これまで3年以上の長きに亘ったコロナ禍の医学教育は、私たち医学教育学講座のメンバーにとっても苦勞の多いものでしたが、一方で昨年の本誌でもご紹介した「パンデミックだからこそできる教育」という視点を与えてくれるものでもありました。例えば高学年においては感染の流行下において、あえて「コロナ検査場での臨床実習」を導入したことにより、学生たちはパンデミックにおける危機管理と実践的感染管理が学べたことと思います。また、低学年においては対面が困難な状況を克服すべく「Teamsを用いたオンラインチュートリアル」を行い、ITリテラシーを高めてもらおうという教育を行うこともできました。また、医学科2年生の成績下位層の学力を向上させる目的に「対面選抜制度」という試みにも取り組みました。この「対面選抜制度」は成績下位層の学生40名程度を教員が推薦・選抜し、それらの学生は動画配信ではなく、実際に大学の教室で対面授業を受けていただく制度です。この制度は学生側の評価は様々ですが、教員側からは、本制度に対して肯定的意見がほとんどで、授業を行う教員のモチベーションの向上にもつながったようです。このようなコロナで得た知見を、さらに今後の教育活動に応用していければと思っています。

最後に、令和5年の夏をもって讃樹会の皆様が学ばれた講義棟が改修工事を受けることになりました。医学教育学講座のオフィスがある2階の医学教育センター及び3階の教授室、准教授室等は夏以降、図書館の2階に移転いたします。ご用の方はそちらまでお越し頂けますよう、よろしくお願い致します。

今後とも讃樹会の皆様の一層のご協力、ご支援を賜りますようお願い申し上げます。(坂東 記)

## 総合生命科学

令和4年4月、全学組織である(旧)総合生命科学センターが研究基盤センターに改組されるのにもとない、(旧)センター担当教員であった教授2(神鳥、竹崎)、准教授4(中北、岩間、吉田、伊藤)により総合生命科学講座は構成されています。医学部、医学系研究科の教育とともに、それぞれが独立にPrincipal Investigatorとして研究活動(遺伝子、生体高分子構造、糖鎖機能、神経科学、等)を進めています。センター改組後も、神鳥は研究基盤センター長、中北は機器共用デジタルラボ医学系担当教員、伊藤は動物実験施設担当教員として、全学および医学部の研究支援を担当しています。また、神鳥、中北、吉田は、香川大学国際希少糖研究教育機構に所属し、希少糖に関する研究にも従事しています。今後も引き続き、教育、研究、研究支援活動を進めていきたいと考えておりますので、よろしく願いいたします。(神鳥 記)

## 血液・免疫・呼吸器内科学

讃樹会のみなさまにおかれましては、まだまだCovid-19にてご苦勞も多いかと拝察申し上げます。血液・免疫・呼吸器内科学教室の近況をご報告申し上げます。

門脇則光教授が講座を主宰され9年目となりました。香川大学医学部附属病院長として超音波センターの設立など新たな改革を次々と実行されています。入局者も香川大学医学部の卒業生、つまり讃樹会会員を中心に毎年集ってきております。まだまだ経験年数が浅い医師が多いですので、ご迷惑をおかけすることもあるかと存じますが是非とも温かく見守って頂けますようお願い申し上げます。

診療について特筆すべきは、昨年血液内科の先進医療として四国初の難治性白血病とリンパ腫を対象としたCAR-T細胞（患者さんの血液から採取したTリンパ球に、血液がん細胞を攻撃できるように「キメラ抗原受容体（CAR）」と呼ばれる特殊なタンパク質を遺伝子導入したTリンパ球）療法を提供できる施設となりましたが、本年はそのCAR-T細胞治療が実際に運用されています。この治療法により、従来の抗がん剤治療抵抗性の患者さんでも高い抗腫瘍効果が得られ、寛解を達成しています。また7月より高松赤十字病院に「膠原病・リウマチ内科」が新規に設立され、亀田智広先生が初代部長として赴任されました。市中の患者さんや医療機関を中心に、さらにお役に立てる体制となりました。県内外の讃樹会会員の皆様のご支援により、3診療科で4,548名（内紹介患者；723名）、入院患者837名を診療させて頂いております。今後も先生方のご期待に添えるよう、医局員全員で頑張っております。

以上近況報告をさせて頂きました。讃樹会の一層のご支援を賜りますよう教室員一同心よりお願い申し上げます。

（土橋 記）

## 循環器・腎臓・脳卒中内科学

南野哲男教授が講座を主宰され8年目に入りました。今年度は循環器グループに山口耕太先生が加入されました。当科では循環器グループ、腎臓グループ、抗加齢血管（脳卒中）グループが緊密な連携を取りながら全人的な医療を提供しています。また、循環器ホットラインや救命救急センターとの連携にて地域医療を支えるとともに、重症心不全患者や難治性ネフローゼ患者に対する高度先進医療を実施し、地域の皆様に高度で最新の医療を提供いたします。重症心不全患者に対する左室補助人工心臓（LVAD）の管理施設、経カテーテル的大動脈弁置換術（TAVI）の実施施設に認定され、さらに特定機能病院としての役割を担っていく所存です。厚労省の事業では、『令和4年度脳卒中・心臓病等総合支援センターモデル事業』と『令和5年度慢性腎臓病重症化予防のための診療体制構築及び多職種連携モデル事業』に選定され、脳卒中・心臓病等総合支援センターの設置、職域へのCKD啓発活動など、さらなる地域医療への貢献を目指します。

今後も、「地域と歩み、ひとを育む」をポリシーとし、香

川県の地域医療を支える人材の育成や循環器系救急医療ならびに安心・安全の標準療法の実践を目標に教室員が一丸となって取り組む所存ですので、今後とも讃樹会会員の皆様におかれましては、一層のご支援を賜りますよう、よろしくようお願い申し上げます。（祖父江 記）

## 消化器・神経内科学

消化器・神経内科は、正木勉教授のもと、「臨床、基礎を問わず行った仕事は必ず論文に仕上げて世界に発信する」を目標に、日々切磋琢磨しながら、日常診療、研究、教育に取り組んでいます。

当科の特徴

- ① 消化器・神経内科は、内科領域の中でも大変多岐にわたり、大学病院という専門性が高く、限られた患者さんのみを診療しているイメージがあるかと思いますが、最先端な医療を行いつつも、common diseaseを取り扱うことも多く、バランスのとれた臨床研修を行える環境にあります。また、大学病院だけで40名程度の医局員が在籍し、各分野の専門医・指導医が教育を行っておりますので医師層は厚く、指導体制は万全です。
- ② 世界のトップレベルを目指した臨床／基礎的研究を活発に行っています。研究グループは臓器別に分かれ、さらに臨床と基礎の研究グループに分かれ、その垣根を超えた横断的研究も行っております。正木教授の考えでもありますが、世界のトップレベルを目指し、臨床に直結する研究を進めております。研究の成果については、国内外の学会等で発表し、学会や研究会等を通じて色んな人に出会えることは、医局にいることの特権ではないでしょうか。
- ③ 香川県内外に12の関連病院を有し、積極的に人的交流をはかっております。大学病院や関連病院で多様な指導医のもと屋根瓦方式で必ず3人以上で医局員を派遣し幅広い臨床研修を行うことが可能なため、プラスの要素は多いと思います。

讃樹会の皆様には今後も一層のご支援を賜りますようお願い申し上げます。（谷 記）

## 皮膚科学

大日輝記教授が就任し4年目を迎え、香川県内の皮膚科医療の再構築を目標に新体制で臨んでおります。今年は新たに1名が教室に加入し、現在は大日教授以下助教1名、医員3名で教室を運営しております。

先生方のご支援のお陰で、新体制発足以降徐々に外来および入院患者数、手術件数ともに増加してまいりました。外来診療においては、脱毛症専門外来やレーザー外来など

を含め幅広い診療を行っています。

院内ではコンサルトに誠実に対応し先生方から信頼される皮膚科となることを目指しております。先生方のお役に立てる事がございましたら、どうぞご遠慮なくご紹介いただければと存じます。地域においては県内外の病院や開業医の先生とのネットワークを形成し、香川県内の皮膚科医療の支えとなるよう医局員一同日々努力する所存です。先日には大日教授就任以来初の同門会を開催することができました。今後とも讃樹會会員の皆様には一層のご支援を賜りますようよろしくお願い申し上げます。(田中 記)

## 精神神経医学

中村祐教授が当講座の教授に就任して19年目を迎えました。中村教授就任以降、香川県内の精神科医療の連携を図るために香心会が創設され、また、香川県との連携が進められ、地域医療精神医学講座が開設されました。精神科への入局者が増えると同時に精神保健指定医も増えております。香川県内の関連病院にも人材を派遣し、地域医療を支える一助となっております。2018年度からは新専門医制度が始まりましたが、精神科専攻医も迎えております。

現在、認知症・児童思春期(2014年4月1日より「子どもと家族・こころの診療部」を引き継いで運営)・摂食障害・睡眠障害・緩和ケアなど、全ての精神科領域をカバーして診療を行っています。身体疾患を合併する患者様については、身体科の先生方には大変お世話になっております。逆に身体科からご紹介を受けることも多々あります。今後も、香川県の地域医療の支えとなるよう、医局員一同努力する所存です。讃樹會の先生方にはより一層のご支援を賜りますようお願い致します。(今井 記)

## 小児科学

小児科では日下隆教授のもと、『共に生き、共に喜ぶ』を目標に、子どもたちと共に成長し、人として『成熟する小児科医』の育成を目指しています。

### 1. 小児医療

個々の教室員が自分の専門分野を自発的に開拓する事を目標とし、地域連携や国際協力も行える人材育成をしています。新生児分野では香川県の周産期死亡率、乳児死亡率は日本で最も低い水準を誇っています。

### 2. 小児科学の研究と教育

この9年で15名が医学博士を取得し、科学研究費助成事業(日本学術振興会)においては、代表11件、分担を含め計49件の課題が採択されており国内外の学会等でその成果を発表しています。

### 3. 国際交流

海外医療への貢献として、ミャンマーにおける新生児黄疸スクリーニング体制の構築を行いました。またブルネイ・ダルサラーム国においては日本国医師免許での実地臨床を

新生児医療領域で開始しました。

今後も香川県の小児医療に、教室員一同力を合わせて取り組んで参ります。讃樹會会員のみなさまには一層のご支援を賜りますようよろしくお願い致します。(近藤 記)

## 小児外科学

当科は、香川大学医学部総合周産期母子医療センターの一翼を担い、香川県小児医療への貢献と発展を掲げ、日々診療を行っています。

小児外科の扱う疾患は頭頸部、胸部(肺・縦郭)、腹部(消化器・肝胆膵・泌尿器)、体表と多岐にわたります。また、【小児は大人のミニチュアではない】と言うように、成人と異なる小児特有の疾患も多く、特別な技術と知識が必要とされるため日々の研鑽が重要となります。

生後まもない新生児から中学生、さらには成人期に移行した方もいます。小児でありながらも、予後の厳しい症例もありますが、子供たちの診療のみだけでなく、ご家族の気持ちにも寄り添った医療を提供することを心がけています。

少子化のなか、より一層小児医療の重要性が増していき事が考えられます。

関連施設である高松日赤病院小児外科はもちろんのこと、地域医療に携わる小児科、産婦人科の先生方と協力し、上質な医療を提供していきます。(田中 記)

## 心臓血管外科学

堀井泰浩

山下洋一(准教授)、北本昌平(助教)、中川さや子(医員)、池田千晶(特別配置梓病院助教)

心臓血管センターの枠組みで、外科・内科がハートチームとして垣根なく協働し、内科で診断し、薬物療法やカテーテル治療を先行させ、適応となればわれわれ外科チームが手術し、手術侵襲から脱した後は、再度内科チームで循環器治療を徹底するという、患者さん中心の医療を実践しています。

昨年から経カテーテル大動脈弁置換術TAVIを開始し、ステントグラフトTEVAR、EVARを含めて血管内治療を、山下准教授を中心に行うとともに、弁膜症に対するMICS治療も積極的に行なっています。

本年度は自治医科大学出身(2015年卒)の池田千晶先生が、心臓血管外科に入局しました。外科には、心臓血管外科の母体第一外科学講座に、第一期生の入局以来となります。自治医大出身者には、香川県から病院助教枠が特別に配置されていたようで、この制度を初めて使用することになり、自治医大出身者の先鞭として、今後の香川大学への入局が期待されます。(堀井 記)

## 消化器外科学

消化器外科は、「患者さん中心の全人的医療の提供」を理念とし、消化器系の良・悪性疾患に対して手術を柱とした安全かつ高度な医療を提供してきましたが、2021年9月に岡野圭一教授が就任され2年目となり「発展」の時を迎えています。

当教室では、低侵襲手術として鏡視下手術を行ってききましたが、現在では日本内視鏡外科学会の認定する技術認定医が各分野にわたり5名在籍する状況となり、近年では、膣・食道・胃・大腸の腫瘍に対してロボット手術を導入し、症例を積み重ね、2名のプロクターを輩出したしております。今後も、後進の指導と共に、高度で安全安心な低侵襲手術を発展させ提供する所存です。

研究では、以前より、難治性癌の1つである膣癌にたいして独自の術前治療を導入する臨床試験を行い、良好な治療成績を報告してまいりましたが、今年度は岡野教授が研究代表者を務める「希少がん、難治がんである十二指腸乳頭部癌の多層オミックス解析と微小環境理解に基づく治療標的的研究」が、AMEDの次世代がん医療加速化研究事業に採択されました。また、その他にも、NCDを用いた全国研究に当科から2課題採択されるなど、臨床面のみならず研究面でも大きな発展を認めています。

近年、外科医を取り巻く環境は、ますます厳しい状況となっていますが、患者さんにとっての最後の砦が崩れないように、学生や初期研修医に対しては消化器外科の魅力を伝え、若手の外科医に対しては修練の場を提供し、患者さんに対しては安全で安心な手術で応えるように取り組む所存です。今後とも、讃樹会の会員の皆様におかれましては、一層のご支援を受け賜りますようお願いいたします。

(岸野 記)

## 呼吸器・乳腺内分泌外科学

当教室では「心と身体に優しい外科医療の実践」を理念に、呼吸器外科と乳腺内分泌外科の臨床・研究・教育に取り組んでいます。

小型肺癌に対する標準手術が「葉切除」から「区域切除」に変遷するという大きなパラダイムシフトに面し、我々は全国にも類を見ない「すべての区域・亜区域に対する完全胸腔鏡下肺区域切除術」を実践しております。技術的に難易度の高い手術を安全確実に施行し、根治性と機能温存を両立できるよう日々精進しております。また、胸壁浸潤癌に対する胸腔鏡下胸壁合併切除術、進行癌に対する血管気管支形成手術や各科と連携した拡大手術など、創意工夫を重ねて「根治を諦めない治療」を実践しております。

当教室には県内外に関連施設（高松市立みんなの病院、KKR高松病院、坂出市立病院、高知医療センター、倉敷中央病院、神鋼記念病院、明和病院、奈良県立医療センター）があり、医局員それぞれが各地域で活躍しております。今年度は倉敷中央病院から池田敏裕先生が帰局し、日々診療に励んでおります。

研究面では、当科から世界へ発信してきたICG併用赤外光胸腔鏡の研究に加え、腫瘍免疫の基礎研究を行って参ります。

2022年4月に着任された矢島俊樹教授による新体制も2年目を迎えました。昨年度の手術件数はこれまでで最多となり、今年度はそれを上回る勢いで増加しております。医局員一同、さらなる治療成績向上へ熱意をもって取り組んでおります。今後ともご指導のほど何卒よろしくお願いたします。

(松浦 記)

## 整形外科

整形外科講座では令和4年9月1日に石川正和先生を新教授に迎え、新体制に移行しました。膝関節外科、再生医療、医療機器開発を専門とされており、当科における膝関節外科診療・研究が一気に活性化されました。石川教授の求心力はとても高く、赴任後まだ1年足らずですが、医局内にはすでに一体感が生まれており、今後の発展が非常に期待されます。

新入局に関しては、伊達直人先生が医員として加わってくれた他、後期研修医として平瀬公威先生が加わってくれました。両名とも医師として高い能力を備えていることに加えてフットワークも良好で、将来がとても楽しみです。また、来年度も1名の入局者が内定しており、医局には明るい話題が増えつつあります。

大学院には4名の医師が入学しました。それぞれ膝関節外科、脊椎外科、手外科、骨軟部腫瘍に関する基礎研究を行っていく予定です。医局にはこの他に4名の大学院生が在籍しており、計8名で基礎研究活動を行っています。

また、今年度は国内留学として産業医科大学と京都大学にそれぞれ1名の医師を派遣しています。これら国内留学を通じて学外の新たな英知がもたらされ、医局がさらに発展できればと期待しています。

診療に関しては、昨今の外傷救急患者数の増加に対応すべく外傷班を創設しました。限りある手術枠の中での外傷診療なので、限界があることは否めませんが、これまでよりもスムーズな対応ができるようになり、大学附属病院および県内の救急医療に貢献できると考えています。

新体制になって間なしのまだまだ未熟な状況ですが、皆様のご指導ご鞭撻のもと、発展していければと考えています。整形外科講座を今後ともどうぞ宜しくお願い致します。

(加地 記)

## 形成外科学

2017年4月に永竿智久先生が当教室5代目教授に就任され7年目となりました。COVID-19も収束に向かい、当教室としては診療、教育ともに益々活動範囲を拡大すべく邁進しております。昨年度に引き続き、今年度も新たな入局者が3名も加わりました。再建に興味のある十河先生、頭頸部領域に詳しい渡邊先生、美容医療の経験もある仙田先生。

明るく若い3名の先生は今後も当教室を担ってくれる貴重な人材です。また後期研修医の教育として県内外の病院での研修を行っており、三豊総合病院、宮本形成外科（広島県）、大阪大学病院、千葉大学病院で計4名の後期研修医が常勤として研修を行っております。現在の診療体制としては医員6名（十河、渡邊、仙田、細川、高橋、福盛）、助教2名（玉井、木暮）、教授の計9名となっています。教授の専門領域である胸郭変形症（漏斗胸）で全国トップクラスの症例数を誇るほか、唇顎口蓋裂、母斑・血管腫分野で他大学と比べても豊富な症例経験を有しています。研究面でも工学解析やシミュレーションの医学応用を中心に研究活動を行っております。さらなる医局の発展を目指し臨床、教育、研究を進めてまいりたいと思います。今後とも形成外科教室をよろしく願ひいたします。（高橋 記）

## 泌尿器科学

2018年に杉元教授が就任され5年目を迎えました。昨年度まではコロナの影響で勧誘活動が制限され入局者の確保が難しい状況でしたが、本年度からは勧誘活動を再開し県内外で研修をしている卒業生に積極的に声をかけていきたいと思っております。

臨床面では、昨年12月より当院のロボット支援手術のダヴィンチシステムがXiとXの2台体制に更新され、従来のロボット手術に加え、腎摘除術や尿管摘除術、仙骨腔固定術など新たな術式を導入いたしました。ただ、手術枠の制限や他の診療科のロボット手術の導入のため、現在ロボット手術の待機期間が長くなり皆様にご迷惑をおかけしておりますが、今後は手術枠の制限も徐々に解除されており待機期間が解消されていくと思われまので、引き続きご紹介を宜しく願ひ致します。また、県内の移植医療を支えるべく当科では生体腎移植のみならず献腎移植も積極的に行っております。

研究面では、前立腺癌や尿路上皮癌、腎癌を対象とした多数の臨床試験や医師主導試験を行っております。そして新たな治療薬を目指す基礎研究も研究が進みヒト初回投与試験も視野に入っております。

対外的な活動としては、昨年2月に全国の泌尿器科医と病理医を対象とした第11回日本泌尿器病理研究会学術集会を主催し、全国から100名を超える参加がありました。

当科では杉元教授のリーダーシップのもと患者さん中心の逃げない、寄り添う医療を目指し精進していきたいと思っておりますので今後ともよろしく願ひいたします。

（岡添 記）

## 脳神経外科学

脳神経外科教室は、2021年4月に三宅啓介先生が教授に就任されてから3年が経過いたしました。昨年度の新規入局者はいませんが、今年度に切望された1名の入局者を迎えることができました。クリニカルクラークシップ

もコロナの影響がずいぶん緩和され、脳外科の臨床現場を体験することで、脳神経外科学への興味や臨床の魅力を感じてもらえるようになりました。今後とも三宅教授を中心として、教員が一丸となって頑張っていく予定です。

臨床においては、かつては治療困難であった巨大動脈瘤、脳底動脈先端部などの分岐部動脈瘤に対して、血管内治療に用いる新たなデバイスにより治療可能となってきました。また脳腫瘍に対する治療も分子イメージングを用いた診断、手術を行っており、神経内視鏡も積極的に活用しております。またパーキンソン病などに対する脳深部刺激療法も行っており、より充実した医療を提供できる体制が整っております。そのため、コロナで入院制限、手術制限があったにも関わらず、全体的な手術件数は増加しております。研究分野では、脳腫瘍、中枢神経PET、脳卒中、救急など各分野において大学院生7名で様々な研究を行っております。「患者さま中心の治療」を念頭に、これからも精進していきたいと思っております。今後とも脳神経外科教室をよろしく願ひいたします。（豊田 記）

## 眼科学

鈴木潔教授が着任され、6年目に入りました。網膜・硝子体外来、黄斑外来、緑内障外来、眼循環外来、斜視・弱視外来、涙道外来の専門外来を中心とした体制で、一同日々診療・研究・教育にあたっております。

ここ数年はコロナの影響で、学会を始め、いろいろな機会ですら外出することがほとんどなく、春を待つ冬眠動物に近い活動状態でしたが、今年に入り、また海外学会に参加できるようになったりと、コロナ前の状態に回復してきています。

今年は久しぶりに新入局ゼロの年となってしまいましたが、若手の成長は目覚ましく、さらなる成長を目指して、意欲的に研修に励んでおり、カンファレンス、抄読会や研修医講義で積極的に質問するなど知識を深めています。今年は秋光先生、十河先生、山田先生の3名が眼科専門医を取得致しました。また、6月からは中野先生が神戸理研に国内留学しています。

今後とも眼科学教室をよろしく願ひ申し上げます。

（山下 記）

## 耳鼻咽喉科学

我々は医育機関の責務として、学部教育・卒後教育に力を入れております。学部教育は実践に重きを置いた臨床実習、卒後教育は全診療科で通用する耳鼻咽喉科・頭頸部外科の知識、技術が習得できる教育プログラムを作成しています。

香川県内関連病院ですが、さぬき市民病院、坂出市立病院、三豊総合病院、小豆島中央病院に常勤医を配置しています。香川県の地域医療に本学が責任を持ち、近年増加し



ている「地域枠」医師の受け皿となるためにも、高松圏域以外の医療機関の充実を図っております。地域医療のニーズに応えるべく、医療機関間の連携を強化し、より充実した地域医療を目指しています。

社会経済の根幹をなす人口の減少が地域の活力を奪う中、卒業生が香川県に残ってくれるような魅力的な卒後研修、地域貢献ができる生涯教育など、これまで以上に、地域の活力向上対策を総合的に推進してまいりますので、引き続きご支援をお願いいたします。（森 記）

## 放射線医学

西山佳宏教授となり、今年度で16年目となりました。

4月に新入医局員（後期研修医）として、小畑 孝文 先生、守田 理究 先生の2名が入局され、若い力が充実してきております。また今年度4月に藤本 憲吾 先生が坂出市立病院に、今上 雅史 先生が香川労災病院に赴任しました。

若手から中堅の先生も順調に成長し、遠迫先生が昨年度「放射線診断専門医」を無事取得し、香川労災病院にて活躍されています。

当科では今までも行われていた甲状腺癌術後や転移などへのヨウ素内用療法と、去勢抵抗性前立腺癌骨転移治療薬による<sup>223</sup>Ra療法に加え、ソマトスタチン受容体陽性の神経内分泌腫瘍に対する治療薬のルテチウムオキシドトレオチド（ルタテラ®）による治療も開始しております。このような核医学治療に関しては放射線診断科医師のみではなく関係診療科の医師をはじめ放射線部・病棟の看護師や診療放射線技師が合同チームとして連携して行っております。

これからも当科では、画像診断、血管内治療、核医学治療を通じて「患者さんに寄り添う放射線診断や治療」及び「放射線診断へ様々なアプローチによる探求」を行っていきたいと思っております。（室田 記）

## 麻酔学

2023年3月をもちまして白神豪太郎先生が退官されました。在職中のご指導に対して深く感謝申し上げますとともに、今後益々のご活躍とご健勝を祈念申し上げます。

2023年8月より荻野祐一先生が教授に就任されました。医局員一同、気持ちも新たに麻酔・周術期医療、集中治療、ペインクリニック、緩和医療におお層精励して参る所存です。

今年度は、藤本悠先生、安田今日子先生、戸田恵梨先生が麻酔科機構専門医を取得されました。更なる活躍を期待しております。新入局員として藤坂真裕美先生（専攻医2年）、岡野澁司先生（専攻医1年）、大和麻友紀先生（同）、依田知也先生（同）の新進気鋭4名を迎えることができました。次世代を担う若い世代の成長が楽しみです。また、小川純先生が奈良県総合医療センターへ10月から留学されます。新たな知見を得て集中治療分野の更なる発展に寄与してくれるでしょう。

手術麻酔においては、COVID-19の感染症分類5類への変更に伴い、病院執行部より麻酔科管理枠の全稼働を求められております。引き続き人的応援をいただいております外科系診療科の皆様には深謝申し上げます。現在、手術の効率化と件数増加を目的に北村裕亮先生が手術部へ再出向し奮闘中です。

今後も医学生、初期研修医に麻酔科の魅力を伝え、更なる入局者を得て地域医療の『縁の下の力持ち』となるべく努力して参ります。関係各位におかれましては、尚一層のご理解とご支援をお願い申し上げます。（岡部 記）

## 歯科口腔外科学

歯科口腔外科学教室は、三宅 実教授が教室責任者として9年目を迎え、7月より愛知県総合大雄会病院より石濱高統先生を助教として迎えました。高尾健二郎が学位を取得いたしました。関連病院として、独立行政法人国立病院機構四国こどもとおとなの医療センターに岩崎昭憲、かがわ総合リハビリテーション病院に伏見麻央、高松赤十字病院に宮脇史佳、愛媛県航空保健センターに南佑子、和歌山県紀南病院に高尾健二郎が出向しております。さらに、アメリカニューヨーク州ストーニーブルック大学がんセンターに宮崎 亮が留学しております。

学会活動として、昨年末には日本口腔外科学会中国四国支部学術集会を、本年7月には日本外傷歯学会総会学術大会を主催いたしました。また、若手医局員を含め、学会発表を積極的に行うようにしております。

診療面では、手術室静脈鎮静局所麻酔枠を新たに設け、小外科手術において患者様のニーズにお応えできるようになっております。

今後も香川県内の歯科口腔外科診療における基幹病院として、チーム医療の充実やサーチャイブをもった医療人の育成に邁進してまいります。（中井 記）

## 臨床腫瘍学

近年、がん診療は分子標的治療薬の進化、がん免疫療法の登場、がんゲノム医療など新たな時代を迎えています。2015年の講座新設以来、臓器横断的ながんの集学的治療をはじめ、地域連携、がん予防の啓発、支持療法・緩和ケアの推進とともに、先進的な診療にも力を入れています。

2019年以降は、がんゲノム医療を積極的に行っています。本年度もさらに多くのがんゲノムプロファイリング検査を行い、がん患者さんに最新で最良の医療を提供していきたいと考えています。また、希少がん（骨軟部腫瘍・神経内分泌腫瘍・原発不明がんなど）診療にも力を入れており、さらに治験や臨床試験などの新規治療開発にも取り組んでいます。本年は新たに2名が入局しました。今後若手の腫瘍内科医の育成にも力を入れ、香川県のがん診療の中心になれるように努力していきます。

今後もよりよいがん診療を行うために努力してまいります。

すので、皆様の引き続きのご指導をよろしくお願い申し上げます。(奥山 記)

## 総合診療医学

総合診療医学では4人のスタッフがそれぞれのSubspecialty専門領域(循環器、消化器、脳神経内科)を生かしながら総合内科として診療を行っています。発熱、全身倦怠感、体重減少など受診時にはすぐに診断がつかない患者さんを対象として診断、治療にあたっています。大学病院は全診療科が専門医の集団ですが、その中でこそ総合診療的な診療が必要な場合もあり、当科が果たすべき役割と考えています。

2018年から新専門医制度が開始され、本教室では「香川大学総合診療専門研修プログラム」を作成し、大学病院と香川県内の地域の病院とをローテーションしながら総合診療専門医資格を取得できるプログラムを用意しています。研究面では各スタッフが専門領域に基づく研究を行い学会発表、論文執筆を行っています。

診療、教育、研究面での本教室の役割を果たせるよう努力してまいりますので今後ともご支援をよろしくお願いいたします。(舩形 記)

## 放射線腫瘍学

2012年1月の活動開始以来、「高精度放射線治療の基礎的・臨床的研究の推進およびがん治療の将来を担う専門医の育成」を目標に掲げています。放射線治療専門医・指導医として柴田教授・高橋助教・穴田助教が、放射線科専門医として西出医員が常勤しています。

臨床面では、昨年の同窓会会報でご紹介した新放射線治療棟において、最新の治療機(リニアック)が2022年5月から稼働しております。強度変調放射線治療(IMRT)・画像誘導放射線治療(IGRT)等に積極的に取り組み、前立腺癌や頭頸部腫瘍だけでなく、脳腫瘍や子宮頸癌に対するIMRTの実績を増やし、通常照射・定位照射(いわゆるピンポイント照射)・小線源治療等と合わせ、年間450例前後に治療を行っています。

研究面では、科研費にも採択されており、国内外の学会や英文論文で成果をコンスタントに発表しています。

皆様には臨床や共同研究でお世話になっておりますが、引き続きのご支援をよろしくお願いいたします。

(高橋 記)

## 医療情報学

昨今、医療DXが叫ばれ、様々な施策が矢継ぎ早に打ち出されています。

大学の医療情報部門に籍を置く身としては、電子カルテシステムが概ね完成した時点で、一定のDXは終わったと

思っており「今からDX」と言われると若干の違和感を覚えます。もちろん、現在が理想と言えるわけではなく、やるべきことはたくさんあります。もっと便利な仕組みを作るべき、と思いつつ、また(よく言われることですが)利便性とセキュリティは二律背反であることから、便利にする反面、セキュリティ予算や人員配置は重くのしかかってきます。現在、日本医療情報学会の副代表理事として、そのせめぎ合いの中で、学会としての政策提言をする仕事を仰せつかっています。現在の施策には、電子処方箋など、十分な制度設計が伴わないまま見切り発車をしているものも散見されます。便利さ、目新しさのみにとらわれず、医療の基本である安心・安全の理念を大事にしながら、地道に進んでいきたいと思っています。(横井 記)

## 薬剤学

薬剤学教室では、安心で安全な薬物療法の支援を行うために、従来よりTDM解析手法の探索、抗がん剤の副作用評価、医療安全に係る薬剤システムの開発などをテーマに研究を行っています。今後の展開として、臨床薬学の知識・技術を駆使した新医療システムの構築や社会的要求の高い医療連携についての研究により、地域の医療連携に貢献できるような業務および研究を展開したいと考えています。

すべての医療者が適正な薬物療法を実践出来るように、また学部生、大学院生への教育支援も行っておりますので、「讃樹會」会員の皆様には広くご指導ご支援ご鞭撻を賜りますようよろしくお願いいたします。(小坂 記)

## 健康科学

健康科学では産婦人科医師である塩田と小児科医師である加藤の、女性二人体制で看護学科の教育、研究を行っています。学部教育では、主に人体に関する基礎知識を学生に深めていただく役割を担っており、将来リーダーとなって力を発揮できる看護師の育成を目指しています。大学院においては、助産学コースの教育に携わり、国際的な視点からの講義に加え、女性医学、漢方、乳幼児発達、母乳栄養に関する研究指導を行いながら、学術的思考を持ち即戦力となる助産師の養成を目指しています。また、看護学コースにおいても健康イノベーションに寄与する研究について、学位論文の作成を目指して研究指導を行っています。臨床に近い研究が可能であることが特徴の当講座であり、現在博士前期課程に2名在籍しておりますが、後期課程も始動しております。先生方の施設におかれまして大学院進学を目指すスタッフがいらっしゃいましたら、お気軽にご連絡いただけると幸いです。(加藤 記)

## 病理診断科・病理部

---

香川大学医学部医学科の同窓会のみなさま、こんにちは。  
香川大学医学部附属病院病理診断科・病理部です。私たちは病理医6名、臨床検査技師8名、事務3名で毎日働いています。患者さんの体から採取された胃生検や手術検体などの組織診、手術時の術中迅速診断、子宮頸部や尿などの細胞診、不幸にして亡くなられた患者さんの剖検など、仕事は多岐にわたります。また、初期臨床研修医や基礎配属、ポリクリ、スーパーポリクリの学生を受け入れており、卒前・卒後教育にも力を入れています。病理診断は最終診断です。治療方針の決定に大きく関与しており、正確で迅速な診断が求められます。プレッシャーを感じることもありますが、臨床的に鑑別診断に挙げられていない疾患を診断できたときはとてもやりがいを感じます。一見、何をしているか分かりにくいと思いますが、自由に出入りできますのでぜひ一度遊びに来てください。病理診断科・病理部一同、お待ちしております。  
(香川 記)



現住所、勤務先、役職、メールアドレスの変更、改姓などがありましたら必ずご連絡下さい。ご連絡は、讚樹會HP、メール、FAX、郵送いずれでも結構です。



香川大学医学部医学科同窓会讚樹會行き

(TEL・FAX 087-840-2291)

スマホはこちら

会員情報変更届

記入日 年 月 日

卒業年	S・H・R 年											
該当するものに○をお付けください	開業医 / 産業医 / 勤務医 / 研修医 / 学生 その他 ( )											
ふりがな												
氏名 (旧姓・旧名)	( )											
現住所	〒											
	公開 可 <input type="checkbox"/> 不可 <input type="checkbox"/>	TEL					FAX					
	E-mail											
勤務先	名称					部署						
						役職						
	〒											
公開 可 <input type="checkbox"/> 不可 <input type="checkbox"/>	TEL					FAX						
	E-mail											
	恒久的住所 (実家)	(氏名・続柄 ) 〒										
公開 可 <input type="checkbox"/> 不可 <input type="checkbox"/>	TEL					FAX						
連絡事項及びメッセージ 												

切り取り線

※公開の可・不可にチェック  を入れて下さい。

(事務局記入) 処理日 年 月 日



## 編 集 後 記

とにかく暑い8月でした、テレビでは、大谷翔平のニュースか35度以上の猛暑ニュースが連日流れ、いずれもニュースは9月まで続きそうです。新型コロナウイルス感染症が感染症法上の5類に引き下げられてから初めての夏。旅行などを思いっきり楽しみたいところにじわじわと感染者増加のニュースが。感染予防も忘れず、4年ぶりの行動制限なしの夏を楽しんだ方も多はず。

今年はAIテクノロジーが一般に浸透してきた年になってきたようです。ChatGPTなどでけっこう高度な情報のやり取りが行えるようになり、クリエイティブの世界では、イラスト、絵画、写真などの生成が行えるようになってきました。ただAIが生成した文章にもビジュアルにも通じることですが、そこには、当たり前ですが「人格」を感じません。AIをツールにして生成物に魂を吹き込むのはやはり人間なのでしょう。この同窓会誌もAIは一切使われていないので、文面に筆者の思いが感じられる構成になっております。

さて、同窓生教授就任挨拶を、平成8年卒の徳留健横浜市立大学医学部薬理学教授よりいただきました。令和5年度の讃樹會研究助成金／奨励金の選考結果を報告させていただきました。小児科の中村先生と消化器内科の大浦先生のハイレベルな研究に対して、特例の研究助成金の同時受賞となりました。讃樹會も、明るい話題の多い一年になることを期待したいと思います。さて、特集では「4年ぶり開催の西医体」や「滝宮総合病院訪問記」「教室便り」が掲載されていますので、ご一読ください。

毎号のことながら、ご多忙中にも関わらず寄稿してくださいました皆様、讃樹會会員、事務局の皆様にご心より感謝申し上げます。更に親しまれるような紙面になるよう、微力ながら努力してまいります。些細な事でも結構ですので、ご意見ご提案がございましたら宜しくお願い申し上げます。

広報局長 谷 文二（平成14年卒・17期生）

## 事務局からのお知らせ

〒761-0793 香川県木田郡三木町池戸1750-1  
TEL 087-840-2291  
E-mail mddousou@kagawa-u.ac.jp  
HP <https://dousokai.site/sanjukai/>

◇医師賠償責任保険を年間通じて受け付けています（途中加入ができます）。詳細は事務局にお問合せ下さい。

◇助成金公募のお知らせ：助成金申請の詳細は、讃樹會HPの「要項・ダウンロード」を参照下さい。

## ◆国外留学助成金公募

2023年度第2回国外留学助成金 2023年9月末日締切  
2024年度第1回国外留学助成金 2024年3月末日締切

◆学会助成金公募 開催前年6月末日までに申請下さい。

## ◆準会員（医学科在校生）対象で、

「学生の国際交流助成」（帰国後1ヶ月以内）公募

◇変更連絡：現住所、勤務先、役職、メールアドレスの変更、改姓などがありましたら必ずご連絡下さい。ご連絡方法は、讃樹會HPから入力、メール、変更届用紙をFAX、郵送いずれでも結構です。

## 訃 報

正会員

田井祐爾先生（平成4年卒・7期生）

2023年5月

謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

# 横浜で会いましょう！ 第22回関東支部会



申込↑

日時: 11月19日(日) 13時～15時半  
(12時30分受付)

場所: ホテルニューグランド本館5F  
スターライトルーム

横浜市中区山下町10番地  
TEL 045-681-1841

みなとみらい線「元町・中華街駅」  
1番出口から徒歩1分～

★ 会費 ￥1万8000円

Event

ジャズヴォーカルライブ



横浜市立みなと赤十字病院  
健診センター長



伊藤 美奈子 いう みなこ

(香川医科大学第9期生)

皆様に『豊かで煌めく毎日』を送っていただくために、市民セミナー開催や予防がテーマの執筆など啓発活動に尽力する傍ら、2021年にジャズ界に進出しました。ジャズは音楽の方程式で解けない無限大の音楽、そして医学はヒトというブラックボックスで起こる事象を解明しきれない学問です。このような共通点を持つジャズと医学の融合イベントを不定期に開催しています。

昨年はスタジオからの生配信で歌をお届けしましたが、今年はリアルでお届けできるので、とても楽しみにしております。

## 参加申込方法 電話又はメール

◆メール 「関東支部会参加希望」、氏名、卒年を記入下さい。  
スマートホンはQRコードから

◆東日本、西日本を問わず、自由にご参加下さい！

**参加申込締切 10/20**

関東支部会 支部会長 内山順造

問合せ先: 讀樹會事務局 [mddousou@kagawa-u.ac.jp](mailto:mddousou@kagawa-u.ac.jp) TEL087-840-2291